HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海道大学附属図書館蔵 二巻本『宝物集』校訂本文
著者	追塩，千尋；北海道説話文学研究会
引用	北海学園大学人文論集，37：292-175
発行日	2007-10-00

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

北海道大学附属図書館蔵　二巻本『宝物集』校訂本文

追塩千尋
北海道説話文学研究会

はじめに

本稿は、先に公にした「北海道大学附属図書館蔵　二巻本『宝物集』翻刻」（追塩千尋　北海道説話文学研究会『北海学園大学人文論集』第三十二号　平成十七年十一月）をもとに作成した校訂本文である。通読の便に供するため、歴史的仮名遣いに統一し、適宜仮名に漢字を宛て、濁点・句読点等を施し、他諸本と校合して一部本文を訂正した。さらに、全体を新日本古典文学大系所収『宝物集』に付された小見出しによって区切り、構成を把握するための一助とした。

江戸時代初期には一定の流布を見た二巻本の本文が、一般に知られることを期待するものである。なお、末尾に「『宝物集』要目および和歌諸本対照表」、並びに「二巻本『宝物集』翻刻正誤表および注の追加」を付記した。

（一）

【凡　例】

一　底本は、北海道大学附属図書館藏二巻本『宝物集』とした。

二　本文作成に際しては、常用漢字表にある漢字はその字体を採用した。異体字・俗字の類も原則として現在通行の字体に改めた。

三　文意不通の場合に限り、底本の本文を訂正した。その際、他の二巻本諸本の本文を優先して採用した。参照した二巻本諸本は左の通りである。

1　上　国会図書館旧上野分館蔵本
2　松　松井簡治旧蔵静嘉堂文庫蔵本
3　小　小泉弘蔵本
4　細　九州大学細川文庫蔵本
5　簗　簗瀬一雄蔵本（『校合二巻本宝物集』碧冲洞叢書第三輯　昭和三十六年一月）
6　宮　宮嶋藤吉旧蔵静嘉堂文庫蔵本
7　萩　九州大学萩野文庫蔵本

これらの諸本は本文の親疎関係から、「底本・上」、「松・小」、「細・簗」、「宮・萩」の四つのグループに分けることができる。注にいう「他七本」とは1～7を、「他六本」とは2～7を指す。また、

必要に応じて次の三種の本文も参照した。

8　平三　平仮名整版三巻本（「京都大学顕原文庫蔵寛永二十年刊『宝物集』翻刻」『宝物集研究』第三集　平成十四年三月　宝物集研究会）

9　大系　第二種七巻本（底本、吉川泰雄蔵本。新日本古典文学大系40『宝物集　閑居友　比良山古人霊託』小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一校注　平成五年　岩波書店）

10　おう　片仮名古活字三巻本（底本、静嘉堂文庫蔵本。『宝物集』山田昭全・大場朗・森晴彦編　平成七年四月　おうふう）

四　和歌・漢籍・経典の引用に関しては二字下げとし、和歌には通し番号を施した。ただし、取意的・要約的引用に関しては、この限りではない。

五　校者（追塩千尋・林晃平・細田季男）の判断により、必要に応じて読み仮名をその語の下に（　）で記した。

六　注は上・下巻に分け、それぞれ通し番号を付した。

（三）

宝物集上巻

1　島から帰ってきた隠士

治承元年の秋のころ、[1]薩摩の国の嶋を出でて、同二年の春、二たび故郷にかへりて侍りしかども、世の中もありしにもあらず。浮木にのりけん人の心ちせしかば、[2]世の憂き時のすみかなれば、心をもなぐさめんとて、東山なる所にこもりゐて侍るほどに、むかし花の下、月のまへにて見なれたりし人、芦垣のまぢかくきたるよしを申せば、竹の編戸をおしひらきて入れ侍りぬ。こころづくしの思ひに年を経ぬれば、[3]老いおとろへて、いきの松原いきてかひなき命ながらへて来たりぬるよしを申したりし。三とせの夢わづかにさめたりといへども、一生涯の夢はいまださめざりけるほどに、人にもしられで侍りつるに、いかにしてたづねては来たり給へるぞ。鬼界の嶋のありさまは、申しても無益に侍るべし。故郷の事、風の伝にても聞きたて侍りき。都を出でて後、いかなる事か侍りし、と申せば、何となく春のつれづれをなぐさめんと思ひて、いたづら事とも申し出で侍りつるに、げにや嵯峨の御釈迦こそ天竺へ帰りたまはんずるとて、一つ京の人院の宮をはじめまゐらせて、道もさりやらず参り侍るなれ、と申せば、[4]我日本の[5]不思議には、この仏のおはするをこそ志しためるに、まことならば心うき事ぞかなしくぞ侍るべき。さなしとても、まゐらでもやあるべきと思へば、

2　釈迦堂参詣の道行

やがて二月二十日ころに[6]中御門をとほりて、大庭の椋の木の本を見るにも、白馬の節会思ひいだされけり。

3　釈迦像の由来

さて御堂にまゐりつきて見ければ、聞くにたがはずおほくの人まゐりあつまりて、稲麻竹葦のやうなり。西の局のうちへいりて、南無大恩教主釈迦牟尼、無上大覚世尊、滅罪生善、臨終正念、とふしおがみて、法花経のひもをときよみ侍るほどに、寺僧とおぼしきもの、となりの局なる人にかたるをきけば、この仏の、日本国へつたはり給へる事と聞きなしつ。教主釈尊、正覚なり給ひてのち、御母伽毘羅国の善覚長者のむすめ、摩耶夫人のために報恩経とき給はんとて、忉利天にのぼり給ひしを、優闐大王のあなかしこにこひたてまつり給ひて、毘首羯磨といふ人にあつらへて、赤栴檀をもつて尊容をうつし奉りて、おがみ給ふ程に、仏、忉利天より一夏九旬はてて、祇園精舎へ帰り給ふ時、地蔵菩薩の金銀水精の三の橋を渡し給ひしに、この木像の仏も、橋のもとまで御むかひにまゐり給ひければ、釈尊のたまはく、我は八十年の化縁つきて、涅槃に入るべきなり。栴檀の仏は末代の衆生を利益し給ふべき仏なり、とて御さきにたててかへり給ひき。天竺にておほくの人を利益し給ひしほどに、弗舎蜜と申す悪王、仏法をほろぼし奉りし時、鳩摩羅琰といひし大臣の、出家入道して、かばかりめでたくおはします仏を、ほろ

（五）

（六）

ぼし奉らん事をかなしみて、東天竺の東に、丘慈国[7]といふ国へ渡し奉りけるに、昼は仏を負ひ奉り、夜は仏に負はれ奉りけるぞ、と申したんめる。丘慈国の蒙遜王、あながちによろこびて供養恭敬し給ひける程に、唐の白鈍王[8]、この事をききて、普闕といふ将軍[9]を遣はして奪ひ取つて、あがめをこなひ給ひけるを、東大寺の裔然上人、入唐してありしに、帝王、この仏を聖人におがませ給ひければ、裔然申していはく、我一人おがみ奉りて、かひなく侍れば、仏をうつし奉りて、日本国王におがませ奉らん、と申しければ、仏像をひろめんがためにゆるされにけり。裔然よろこびて、いそぎうつし奉る程に、栴檀の仏、夢の中につげてのたまはく、我東土の衆生を利益すべき願ひあり。我を渡すべし、とのたまひければ、裔然心つきて、新仏を、ふるき仏のやうに煙をもつてふすべたてまつりて、栴檀の像にとりかへて、日本国へ渡し奉りける仏なり。さては二伝の仏にては、おはせざるなり[10]。裔然、帰朝して、宇治殿へ申し奉りたる文には、優闐王の、赤栴檀をもつてうつしまゐらせ給ひつる釈迦の像一体、とぞ侍る。また、白鈍王といふ王の名も、不審なり。符堅といふ王、呂光といふ将軍を遣して、取りたり、と見ゆる物も侍り。また、張騫等の将軍をば、八十人をやる、と申したるも侍り。大江匡衡、かの六波羅蜜寺にて、

昔忉利天安居九十日　刻赤栴檀而模尊容　今抜提河滅度二千年　冶紫磨金而礼両足

と書きたるも、この仏の御事ぞかし、と思ひ出でられてあはれなり。内記上人のほめられけるもことはりにぞ侍る。

4　宝物の論

やがて帰るも木の下にて日暮れにければ、道もおそろしかりぬべし、あけてこそ下向せめ、とて侍るほどに、[11]よひの間はまゐいりあつまりたる人ども、ののしりさはぎて[12]物のあはれもさむる程なりしが、やうやう[13]ふけゆくままにあやしの下守、[14]老いたる尼法師は、寝入りたるなるべし。ものの[15]心ある人人ばかり目をさましつつ、こしかた行末の事までかたる程に、あまり物をいひはやりて、ある人のいへるは、そもそも人の身には、何か第一の宝にてあらむ、といへば、そばよりさし出でていふやう、

4　宝物の論　一　隠蓑が宝

人の身には隠蓑といふ物こそ、第一の宝なれ。くひ物、欲しき物、心にまかせてとりかくして、いはん事をもきく。また、ゆかしからん人のかくれんをも見るべき物なり。これほどの宝やはある、といへば、そばより人出でて物をねがはんに、いかで人の物をとらん、とは申すべき。それは盗人にてこそあれ。龍樹菩薩の陰形の法そらあらはれて、下法をすてて菩薩の行におもむきて、馬鳴の弟子になり給ひにき。されば、ある人ふたりつれて道をゆくに、金を見つけながらこれをとらず。伴したるものの、何とてこれをばとり給はぬぞ、といへば、天知る、地知る、汝知る、我知れり。ぬしに知られぬ物をば、いかでとるべき、とてつひにとらず。四知をはづるとはこれをいふなり。かしこき人は、人のあたふる物なれども、とるまじき物はとらず。

（七）

4　宝物の論　二　打出の小槌が宝

されば、打出の小槌といふ物こそいみじき宝なれ。ひろき野に出でてすみよからむ家、つかひよからむ下部、馬牛、食物にいたるまで打ち出だすなり。これこそ人の物をもとらず、めでたきたからなれ、といへば、

4　宝物の論　三　打出の小槌は宝にあらず

また、そばより、打出の小槌は宝なれども、くちをしきことひとつあり。そのゆゑは、鐘の声をだにきけば、打ち出だしたる物ども、こそこそと失することのあるなり。さやうの時、ひろき野中にただ一人赤裸にてゐたらんは、いと物うかるべき事なり。貧苦よりおとろへたるくるしみはたへがたきなり。されば、天人の五衰は、地獄のくるしみにまさる、と申せば、無益にて侍るべし。また、昔より隠蓑、打出の小槌持ちたりと申す物きこえ侍らず、隠蓑の少将、と申す物語にあらまし事をつくりて侍る、とこそうけたまはれ。

4　宝物の論　四　金が宝

ただ金に過ぎたる宝なし。火に入れどもやけず。水に入れどもくちせず、いよいよ光をます物なり。

千両の金とていみじくきこゆれども、ちひさき物に入れて身にそへてもちぬべし。されば、天平勝宝二十一年の春、陸奥の国より砂金はじめて奉りたりしに、我が君も、国におほきなる重宝まゐりたり、とて大伴家持に歌めされけるに、

1すべらぎの御代さかへんとあづまなるみちのく山にこがね花さく

とはよみけれ。天に五行あり。金その中に至る。地に七宝あり。金をもつてはじめとせり。仏を金人と申し、御門を金輪聖王と名づく。神を金峰山おはす。経に金光明経あり。仏もこれを宝と思ひ給へり。智者もこれを宝といふ。金の宝なるゆゑにおのおの金の字を具するなり、と申せば、

4　宝物の論　五　金は宝にあらず

また、そばなる人さし出でて、金はまことに火にもやけず、水にもくちせねども、盗人にとられてはいたづら事なり。天竺にて、仏、阿難をぐして道をとほり給ふに、草むらの中に光あり。その中に金あり。これを仏御覧じて、毒蛇あり、とのたまふ。阿難これをさとりて、大毒蛇なり、とうけこひ給ひぬ。[16]ある人これを見れば、蛇にあらで金ありければ、よろこびてとりぬ。このことをおほやけきこしめされて、めしければ、力およばず、これをまゐらせけるに、なほも残りぞあるらんとて、責めをかうぶる時にこそ、仏の毒蛇とのたまひし事を、おもひあはせける。

また、ある兄弟、親の手よりおのおの五百両の金をえて、帰る道にて弟、かの金をすてけるを、兄、何ゆゑにすつるぞ、ととひければ、弟、なくなくかたりていはく、五百両の金をもちたるゆゑに、兄の

もち給へる五百両をうばひとりて、千両になさばや、と思ふ一念おこりぬ。されば、金はうたてき物とおもふがゆゑにすつるなり、といひければ、兄、涙を流して、我も汝をころして、五百両をとりて千両になさばや、と思ひつるなり、とて五百両の金をすてにけり。これを断金の契りといふなり。されば、金をも宝といふべからず。

4　宝物の論　六　玉が宝

玉にまされる宝やはあるべき。花厳経には、一切の宝の中に、如意宝珠すぐれたり、と見えたり。まことに心のごとくなる玉をえては、五穀七宝、なにかとぼしかるべき。されば、稲麻経[17]には、現世をいのるは、草鞋[18]をこふるがごとし。稲をえつれば、ねがはざれども草鞋をばはくべきものなり。また、玉をうれば、ねがはざれども、金はふるべきなり、といへば、

4　宝物の論　七　玉は宝にあらず

またそばなるひとのいはく、玉は宝なりといへども、末の凡夫は玉を宝とも知るべからず。ことにみがくやうをも知らず。されば、弘法大師は、玉みがかざれば光なし、光なきをば石瓦とす、とぞおほせられける。されば、いづれの宝も無益なり。

4　宝物の論　八　子が宝

つくづく物[19]を思ふに、子に過ぎたる宝なし。そのゆゑは、人の老い衰ふる事、貴賤賢愚によらず。黒き髪は白くなり[20]、赤き色は黒みかじけて、額には四海の波をたたみ、眉には商山の霜をたれ、骨こはく、腰かがまりて、甘き味はひは苦くなり[21]、やはらかなる水はこはくなりて、よろづ心にかなはず。されば、太天王[22]は、はじめて白き髪すぢのおふるは、閻魔王の一番のつかひつきたり、とて出家しておこなひ給ひき。震旦の白居易は、四十六の歳、かたちを鏡にうつして、涙を流してふたをおほひき。

また、大聖世尊の五十あまりになり給ひて、満月の尊容衰へ、三十二相の御すがたやつれ給ふを見たてまつりて、優陀延[23]と申す御弟子の老いの苦しみを嘆く事侍りき。いはんや末代の凡夫、いかでかこの苦しみを嘆かざらんや。されば、この心を詩にもつくり、歌にもよめり。その証拠を申すべし。

昔は京洛のはなやかなる客たり。今は江湖[24]のおちぶれたる翁となれり[25]

とつくりたり。また、歌に、

2いづかたに身をばよせまし世の中に老いをいとはぬ人もなければ

3かはり行くかがみの影を見るからに老いその森のなげきをぞする

4いつとても身のうき事はかへらねど[26]昔は老いをなげきやはせし

まことに老いのすがた、ふりにけるかたちをば、見る人これをにくみ、きく人かれをいとふなり。

子にあらざらん人、たれかあはれむべき。人の子の親のために宝なる事、かつがつ[27]申すべし。孟宗といつし人の親、とし老い衰えて物くはざる病をしけるが、霜月の末、師走に[28]およぶ折ふし、たかんなだ

（一一）

にあらば物くひてん、とねがひければ、たけのことといふ物は四月の末、五月の初めばかりにこそ見ゆれ。今は竹の林には霜ふり、雪つもりていかにもとむるとも得んことかたし、とは思ひながら、孝養の心ざしふかき物なれば、雪霜をかきわけて、竹のねごとをほりもとめしかば、雪の中のたかんなを得て、老いたる親の病をたすけ侍りき。子にあらざらんもの、いかでか雪の中のたかんなをもとむる事あらんや。

また、伯瑜[29]といふ人の母、きはめて腹あしく、心たけくして、伯瑜を打つ事いとけなかりし。昔より成人の今にいたるまで怠る事なし。母やうやう老い衰へて、また子を打ちける時、伯瑜悲しめり。母あやしみて、汝を打つこと昔より今にいたるまでたゆる事なし。然れども一たびも泣くことなかりしに、何とて今初めて泣き悲しむぞ、と問ひければ、伯瑜がいはく、わが母の若くさかりにおはしましつる時の杖は身にしみて痛かりき。今年は老い衰へ給ひたるにや。打ち給ふ杖、身にしみ痛むことなし。されば、わが母の余命少なくなり給へる事の悲しきなり。まつたく杖の痛きに泣くにはあらず、とぞいひける。

これのみならず、丁蘭が木[30]、郭巨[31]が金の鍋、白年が衾、王祥が氷の魚、みなこれ教養の事なり。丁蘭は母失せてのち、母の形を木をもつてきざみ[32]、生きたりし時のやうにつかへしなり。郭巨は親をやしなはんがために、悲しかりける子を山の中に埋みしほどに、天道あはれみたまひて、金の鍋をほりいだす事ありしなり。白年が親はさむかるらん[33]とて、寒夜に衾をぬぎし事あり。王祥が親はみききせぬ[34]魚なければ物くはぬ事を悲しみて、氷ふさがりたる江にまかりて見れば、魚、氷をつきうがちて躍り上がりしなり。かやうの事はこまかに蒙求などやうの文に記せり。

これらは大国の事。吾朝にもかやうの事多くきこえたり。軽ノ大臣と申しける人、御門よりの御つか

ひにもろこしへわたり給ひけるを、いかなる事かありけん。物いはぬ薬を食はせて、身には絵をかき、頭には灯台といふ物をうちて火をとぼして[35]灯台鬼といふ名をつけてあり、といふ事を、御子の弼の宰相と申す人の、ほのかに伝へ聞きて、悲しみ給ひて、万里の波路をしのぎて震旦までたづね行きて見給ひければ、大臣涙を流して、指を食ひきりて血を出だしてかくぞ書きたまひける。

形は破れて他郷の灯の鬼となる、争か旧里にかへりてこの身をすてん[36]

これを見たまひけん御子の心のうち、いかばかりか思ひ給ひけん。さて、唐の御門に請ひうけたてまつりて、日本へ具したてまつりてかへり給へり。子にあらざらん人、はるばるの海路をわけてもろこしまでたづね行く人ありなんや。この外もろこしへ渡りてとどめられし人、あまたありけり[37]となん。

また、ある女の、僧[38]を請じまゐらせて、かたのごとくなる仏事をして、手箱を一つ布施にしたりけるをみれば、かくぞよみて入れたりける、

5玉くしげかけごにちりもすゑざりしふたおやながらなき身とをしれ

されば、かなはぬ人も親の教養の心ざしはふかくぞ侍りける。それならず、親に心ざしふかく見ゆる人を歌にて少々申すべし。藤原道信の卿の歌、

6かぎりあればけふぬぎすてつ藤衣はてなきものは涙なりけり

平棟仲の卿の歌、

7思ひかねかたみにそめし墨染の衣にさへもわかれぬるかな

みなもとのありつねの中将[39]の歌、

8藤衣など一とせと契りけんこればかりこそかたみと思ふに

（一三）

中納言なりのりの卿の歌、[40]

9 鳥部山思ひやるこそかなしけれひとりや苺の下に行くらん[41]

昔今の人々かやうに心ざしふかく、嘆き悲しむ事も、子にあらざらん人の、たれかおもひよるべき。されば、子なからん人は、物うき事なり。後の世までも宝となるは、子にぞあるべき。

秦の良郭といふ人と[43]阿用子といふものと、二人死して閻魔王宮にめしおかれて、罪の軽重をただされけるに、良郭は子を持ちたり。冥土をとぶらふべきものあり、とてまづさしおかれ、阿用子はとぶらはるべき子を持たざるものなり、とてたちまちに地獄へつかはされにき。また、仏、阿難を具して道を行き給ふに、あさましき餓鬼の、心ちよげにて舞ひたのしむあり。阿難、仏にゆゑを問ひ奉り給へば、仏、阿難に告げてのたまはく、前生の罪業によりて、あさましき餓鬼のむくひ[44]をうけたりといへども、生むところの子の、善を修するが故に、たのしみをうくるぞ、とのたまひけり。[45]しかのみならず、大目連尊者は、母の精提女の餓鬼道におち給ひしかば、僧衆を請じ供養し給ひし功力によりて、母の飢ゑをたすけ給ひき。これは盂蘭盆経にこまかに見えたりといひければ、

4　宝物の論　九　子は宝にあらず

子ほどの宝なしとのたまへども、人ごとに教養の心ざし侍らず。人の子の、親のためにかたきなる事を少々申すべし。仲文章と申す文に見えたり。朝哺といふもの、父を打ちしかば、毒蛇その身をすふ。酉夢といふもの、母をのりしかば、天の鳴る神落ちて其の身を裂く。また摩伽陀国の阿闍世王の、いま

だ太子にしておはしましける時、[46]父の頻婆沙羅王をほし殺したてまつりて、御位をとらむ、とて牢にこめ給ひければ、御母の韋提希夫人悲しみ給ひて、瓔珞に蜜といふ物をぬりて、忍びて大王に舐めさせたてまつり給ふよしを、太子聞き給ひて、はやくほし殺さんとする父の命を助けたり、とて、剣をぬき給ひて韋提希を殺さんとし給ひければ、耆婆・月光といふ二人の大臣の、太子に申すやう、父を殺すものはおよそ一万八千人なり。母を殺すものは、いまだ聞きも及ばず。母の御命を助け給はずは、二人の大臣仕へたてまつらじ、と制しければ、母の御命ばかり助け給ひぬ。父の王をばつひにほし殺し給ひにけり。また、貧苦なるものは子を養ひかねて、悲しむのみならず。あるいはいとけなき子を捨ておきて、冥途に赴く時は、心苦しく離れがたき事をなげき悲しむ。[47]臨終のさまたげとならずや。されば、第六天の魔王は、一切衆生の仏道ならむ事をさまたげん、とて妻子となる、と申しぬれば、かたきと申すもひが事に[48]あらず。恒伽河のほとりに端厳なる女一人、泣き悲しめる事あり。阿難、仏にこのゆゑを問ひたてまつり給へば、仏ののたまはく、この女かたちはうるはしく美しけれども、生むところの子、罪をつくるがゆゑに、母罪に沈みて苦しむぞ、とおほせられけり。されば、子を宝とは論ずべからず。

4　宝物の論　十　命が宝

ただ子もほしからず、人の身は[49]命に過ぎたる宝なし。仏、寿量品にいたりて久遠実成をあらはし給へり。命の長き事を説き給ふなり。かりに栴檀の煙と昇り給ひしかども、まことに霊山の月ほがらかなり。この心を歌にて少々申すべし。藤原基俊の歌、

（一五）

10うら山し心の雲や晴れぬらん鷲のみ山に照る月を見て

張騫が漢武の使ひにて、天の河の水上を尋ねて帰れ、とおほせありしに、りうはくせい[50]尋ね行きて仙家に入りて、やがて帰ると思ひけれども、七世の孫にあひし事も、命のありしゆゑなり。これも仙家にてくれなゐの雪を食ひ、紫の菊を飲みしゆゑに命長かりしなり。されば、堀河の右大臣の歌、

11会ふまでとせめて命の惜しければ恋こそ人の命なりけれ

まことに命は、たれも惜しき物なれば、命こそ宝にてありけれ、といひければ、

4　宝物の論　十一　命は宝にあらず

また、そばより少しなまりたる声にて、命を宝とのたまへども、老少不定のならひなれば、命もまことの宝にあらず。つらつら思ふに、仏法こそありがたき宝なれ、とぞ申しける。

5　仏法が宝

かかりける折ふしに、はなやか[51]なる女の声にて、そもそも仏法の宝にてあらんいはれを聴聞せばや、といひければ、さきの声なまりたる僧のいはく、三宝とて仏法僧の三つあり。このいはれをば一代教主釈迦如来の説かせ給ひぬれば、愚僧はじめて申す義にあらず。

5　仏法が宝　一　普安王のさとし

天竺に国王おはしましき。名をば普安大王と申しき。隣の国に四人の国王のおはしますが、愚かなる事を悲しみて、方便をもつて教へられたり。四人の国王を迎へて山海の珍物をととのへ、玉のさかづきにて酔ひをすすめ給ふついでに、普安大王ののたまへるは、そもそも四人の国王何事をか好みおぼしめす、と問ひ給ひければ、おのおの心うち解け給ひて、一人の王は、我つねに国王の位にて大臣公卿に囲繞せられ、百姓万民にあふがれてあらまほし、とぞのたまひける。一人の王は、つねに[52]父母六親眷属に添ひて、立ちゐの姿を見えばや、と思ふなり、とのたまふ。一人の王は、我つねにかたちよき人に睦びて、明け暮れたはぶれ遊びてあらまほし、とぞのたまひける。一人の王は、我つねに春の野に出でて花を見、小松を引きて遊ばん[53]と思ふ、とのたまひける。おのおのかやうにのたまひて後、さて、普安大王は何事をか好みおぼしめす、とありければ、普安大王答へてのたまふ。我は十善の位に居て楽しむ事はめでたけれども、妻子・珍宝・王位は後の世まで身に従ひつく事なし。父母六親眷属にあひ添ひて、孝養の心ざしをいたさばやとは思へども、生死無常心にかなふべからず。また、かたちよき人にも添ひ果つる事あるべからず。

されば、あしたには紅顔ありて世路に誇れども、暮には白骨となりて郊原に朽ちぬ、といふ本文あり。まことにいまだ若くさかりなる時は、紅顔翠黛はなやかなれども、老い衰へて命尽きぬれば、野原に朽ちて白骨ばかり残れり。また、春の野に出でて霞にうそぶき、花にたはぶるる事はおもしろけれども、春をとどむるに春とどまらず。ただしばしの興なるべし。ただわがために生生世世まで宝となれるがゆ

（一七）

ゐに、仏法といふ物こそ信仰し修行して侍れ、[54]とのたまひければ、四人の王、普安大王のことばを感じ給ひて、やがて仏の御もとへ参り給へる。こまかに五王経に説き給へり。

5　仏法が宝　二　仏法遭い難し

まことによろづの宝にはあふ事ありといへども、仏法の宝にあふ事のかたきなり。されば、法花経にも、

一百八十劫　空過無有仏　三悪道増長[55]　阿修羅亦盛

この経文の心は、一百八十劫、空しく過ぎてのちは、仏まします事なし。三悪道いよいよ増長して阿修羅といふ外道、盛りなるべし、となり。またいはく、

無量無数劫　聞是法亦難　能聴是法者　此人亦復難

この文のこころは、無量無数劫にも、この法を聞く事難し。能くこの法を聴かんものは、[56]この人また難し、と説き給へるなり。されば、顕密の聖教八宗に分かれて、経論およそ五千三百十二巻なり。舎利弗の智恵、富楼那の弁舌、なほし及ぶところにあらず。いはんや凡夫のわれらにおいてをや。いかでか述べ侍るべき。

5　仏法が宝　三　諸法空・諸行無常

しかりといへども、田舎山寺にしばし侍りしが、勧学院の雀の蒙求をさへづり、七金山の鳥には黄色なる翼のおふるなるやうに、おのおのうけ給ひしは、諸行無常を観ずるを仏の大意とは申すとこそうけたまはれ。大聖世尊四十余年の間、多くの法を説き給へるにも、みな諸行無常なり、と[57]こそ説き給へ。されば、金剛般若経には、

一切有為法　如夢幻泡影　如露亦如電　応作如是観

この経文のこころは、一切のあるところのものはみな夢まぼろし、泡かげのごとし。露のごとく、また、いなづまのごとし。かくのごとく観ずべし。[58]また、出曜経には、

此日已過　命即衰滅　如少水魚　斯有何楽

この文は、今日すでに過ぎぬ。命すなはち滅して、[59]少なき水の魚のごとし。これいづれの楽しみかあらん、となり。

5　仏法が宝　三　諸法空・諸行無常　1　維摩の十喩

また維摩経の十喩とて、十のたとへにも、この身は、水に宿れる月のごとく、いなづまのごとく、夢のごとし、などと申したれば、はやく諸行無常を観じて、仏法の宝と思ひ給ふべきなり。されば、維摩経の心を紀貫之がよめる、

（一九）

12手にむすぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にもすむかな

また、権僧正永縁が歌に、同経の心をよめる、

13長き夜の夢のうちにて見る夢はいづれかうつついかがさだめむ

されば、

諸行無常　是生滅法　生滅滅已　寂滅為楽

と観ぜん人は、みな仏法の宝をまうくるなり。諸行無常は、天に昇るはし、是生滅法は、愛欲の海を渡る舟、生滅滅已は、つるぎの山を越ゆる車、寂滅為楽は、八相成道の仏果[60]なり。このゆゑに釈迦如来、因位の御時、雪山童子にておはしましけるに、天帝釈の羅刹といふ鬼に変じ給ひて、諸行無常、是生滅法、の二句をさづけたてまつりし時、童子のたまはく、この文には、いまだ末の句あるべし。同じくさづけ給へ、とおほせられければ、羅刹のいはく、さづけたてまつるべけれども、飢ゑにのぞみてあり。われは人の血を吸ふ物なり。童子の命をわれに与へ給はば、末の句をさづけたてまつらん、といへば、童子のいはく、命を与へたてまつりて後は、何のもののさづかり候ふべき。先づ、末の二句を与へ給へ。聴聞して、命を捨つべし、とのたまひし時、生滅滅已、寂滅為楽の文をさづけたてまつりぬ。童子、この文を聴聞し給ひて、すでにけはしき雪山の峯より谷に向ひて身を投げ給ひし時、羅刹御身を受け止めまゐらせて、御身の心を見む為なり。命を捨て給ふべきにあらず、とのたまひけり。

されば、半偈に身を投ぐるといふ事は、この因縁なり。祇園精舎の鐘もこの文をとなへしなり。いはんや、蜉蝣のあだなる命にて、いかが諸行無常を観ぜざるべき。羯鹿のはかなき身なり。なんぞ是生滅法をさとらざらむ。出づる息は入る息を待たず、石火の光のうちに、いくばくの楽しみかあらん。天衆

人王の位をうけたりといふとも、何の益かあらん。いはんや、そのしたしたにおいてをや。主につかへ、人をたのみて、かなはぬ世路いとなみて、いたづらに老い衰へて、冥途の旅におもむかん事、あさましき事なり。賢き人は、みな過去遠遠を流転を観じて、名利をばもとめぬ事なり。

されば、許由といつしものは、位に即くべきよしを聞きて、潁川といふ河にて、耳をあらひしかば、巣父といふもの、このよしを聞きて、その河の流れをきらひしなり。これみな諸行無常を観ずるゆゑなり。無言太子[61]の、十年物をいはず、別成太子の七度まで位を辞し給ひしも、是生滅法をさとり給へるゆゑなり。

5　仏法が宝　三　諸法空・諸行無常　2　荘周の夢

されば、荘周といつし人の、夢に百年の間、小蝶に成りて、花の上にすみけるが、おどろきて、夢か現かと分きかねてぞありける。この心を大江匡房の卿の歌に、

14百年は花に宿りて過ごしてきこの世は蝶の夢にぞありける

これならず、心ある人は、この世をばさらに現とは思はざるなり。大江匡衡の歌に、

15夜もすがら昔の事を見つるかな語るや現ありしよや夢

むかし天竺の国王、我が国のうちに仏法を信ぜんものをば、命を絶つべし、といふ宣旨をなしたまひけるにだに、五百人の中の第一妃一人、命を王に奉りて、仏法をあがめ給ひき。これまた諸行無常を観じて、後の世をなげき給へるゆゑなり。されば、あさましき穢土に心をとどめて、後の世を厭はざるも

（二一）

のは、蓼はむ虫の、甘露のあぢはひのある事を知らざるがごとし。まことに井の中のかいるの、大海の広きをさとらざるに似たり。五根のあだなる身は、楽しみありても、ひさしからず。霜露のはかなき命は、栄えありとてもいくばくならん。いはんや、あるにつけても憂へ、なきにつけて憂へ、一生は尽くれども、望みはさらに尽きせざる物なり。返す返す生死に着する事なかれ。

ここをもつて、弘法大師は三教指帰[62]といふものに、大き楽しみ、大きに笑ふは、大きおとろへ[63]、大きに悲しむべき相なり、と書き給へり。

さらば、正法念経には、智者は、憂へ[64]をふくみて牢獄のうちにこもれるがごとし。愚者は、よろこびをひらいて、光音天にむまれたるがごとし、とは説き給へり。しかのみならず、心ある人はみな冥途の苦しみを悲しみて、娑婆の楽しみをば厭ひ思ふなり。毛血律師は地獄の苦しみを悲嘆せしかば、毛の穴ごとより血の出でしなり。

昔、証果の羅漢一日に衣を三たび洗ひ給ひけるを、弟子あやしみてゆゑを問ひければ、それも地獄にありし事を思ひ出だすに、血の出でて衣のけがるるなり、とぞのたまひける。

一生は過ぎやすし、万事は夢のごとし、年月は射る矢のごとく暮れゆくなり。これを隙（ひま）ゆく駒、羊の歩みにたとふるなり。されば、心ある人はかくぞよめる。藤原範永の歌、

16山の端に隠れな果てそ秋の月この世にだにもやみはまどはじ

神祇伯顕仲の女の歌、

17この世だに月待つ程は苦しきにあはれいかなるやみにまよはん

よみ人しらざる歌、

18長き世の苦しき事を思へかし何なげくらんかりの宿りを

5　仏法が宝　三　諸法空・諸行無常　3　二人三餅の譬喩

仏、譬喩経にとき給ふ。たとへば人ふたり道を行くとて、あらまし事に一人がいはく、ただいまもちひを三つ拾ひたらんに、いかがせんずる、といへば、今一人がいはく、一つづつ食ひて、のこる一つを中よりわりてこそ食はめ、といへば、もとめたる物こそ二つは食はめ、といふ。今一人は、おなじ道をおなじやうに行くはおなじきにこそくはめ、と論じて、なきもちひゆゑあらそひける。濁世末代の衆生はこのやうになき福祐をあらそひて、万人といさかひ論ずるなり。生者必滅とてむまるるものはかならず死するなり。盛者必衰とてさかりなるものはかならずおとろふるなり。生あるものも生なきものもそのまま常住なるものなし。ここをもつて行基菩薩は、浄土にあらざる外、いづれのところか心にかなふ処あらん。聖衆にあらざらんほか、たれか思ひにしたがふ人あらん、とのたまひしなり。はやくこの心にたがはず浄土をねがひ、聖衆のたすけを頼み給ふべきなり。人界にむまるる事は、大海のそこに針をしづめて、八万由旬の須弥山のいただきより糸をくだして、針のみみをとほさんよりもなほまれなる事なり。[66] 仏法にちかづく事は一眼の亀の浮木にのぼれるがごとし。このたび仏法をまうけずは、またいづれの時をか期せん。はやく頭燃とて、かしらに火のつきたるをはらふがごとくいとなみて、あすをまつ事なく修行し給ふべし。されば、心ある人はかくぞ詠める。待賢門院の兵衛が歌、[65]

19いつまでとのどかに物を思ふらん時の間をだにしらぬ命に[67]

（二三）

5　仏法が宝　三　諸法空・諸行無常　5　人命おぼつかなし

唐の太子賓客白楽天は、人生まれて百年をたもつといへども、日の数をかぞふれば三万六千日なり。その百年をたもつものは百人の中に一人もかたし。老少不定のさかひなれば、命つきていづれの野辺、いづれの山のふもとにかすてられて、五体ところどころに散在して、つちあくたとならむずらん。まことに今生の身のはていかにもなげくべき事なり。されば、清少納言が枕草子に、[68]

20思ひ出づる時ぞかなしき世の中はそら行く雲のはてをしらねば

また前の斎宮大夫が歌に、

21きえはてん夢[69]のわが身のおき所いづれの野べの草葉なるらん

これらの人はみな諸行無常を観じ仏法の宝をまうくる人なり。法花経の方便品に、

見六道衆生　貧窮無福恵

ととき給へり。この要文の心は、六道の衆生を見れば貧窮にして福恵なし。国王大臣もまづしき人なり。

5　仏法が宝　三　諸法空・諸行無常　6　飛花落葉

ただ仏法を修行する人のみ宝をまうくるものなれば、忉利天の億千歳をたもつたのしみも、大梵王宮の深禅定のたのしみも、仏法を修行せんにはしかじ。縄をむすび木をきざみて、物のかずをさだめしむかしだにも、心ある人は花の散り、木の葉の落つるをみて飛花落葉を観じ、生死無常をばさとりけり。

いはんや欽明天皇の御代にはじめて聖教この国へわたり、上宮太子の御時より仏法ひろまりて後、心ある人はみな諸行無常なりとしり、仏法を修行す。しかりといへども、過去の罪業ふかきものは[70]、仏法のものがたりを人のすれば耳をおほひ、めをふさぎて結句仏法僧をあざむくなり。これみな無隙地獄のすもりとなるべき人なり。されば飛花落葉を観じたる歌、仁和寺御室[71]のよみ給へる、

22はかなさをうらみもはてじ桜花うき世はたれも心ならねば

素覚法師が歌、

23世のうさに秋の木のみもふかければおつる涙ももみぢしにけり[72][73]

とかやうにねんごろに語りければ、この女かくうけたまはり候へば、まことに仏法ばかり宝なり。いまより後は、仏法を宝とのみ思ひたてまつるべきなり。さても六道の御物語のたまひつるは、なになにを申すにや、と問へば、

6　六道

僧こたへていはく、六道を知らぬ人や候ふべき。今の世には五つ六つの幼きもの、いやしき下臈などもみな知りたるなり。しかれども、仏の御前にて、知りながら、よも問ひ給はじ、と思へば、かつがつ申すべし。六道と申すは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上これらを申すなり。無始生死よりもろもろの仏の利益にもれて、鳥の林をはなれず、車の庭にめぐるがごとくにして、六道に沈淪するは、仏法の宝をまうけざりしゆゑなり。法華経に、

（二五）

墜堕三悪道　輪廻六趣中

とのべ給へり。この心は、三悪道におちて、六趣に輪廻す、とのたまへるなり、とかたりければ、[74]この女、地獄・餓鬼・畜生のありさまこそ聞かまほしく候へ、といひければ、六道の事は、恵心僧都の一代聖教をひらいてえらび給ひつる、往生要集と申すものにこまかに記されたり。いまだ見給はずや。をろをろ申すべし。

（二六）

6　六道　一　地獄

第一に地獄といふは、この閻浮提の下、一千由旬にあり。等活・黒縄・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・阿鼻大城なり。これを八大地獄といふなり。これにまたおのおの十六の別所を具したり。総じて一百三十六地獄なり。この山中海辺にも地獄あり、とぞ倶舎と申す文には見えたり。まことにさるやらん。越中国立山の地獄より、近江国愛智の大領と申すもののむすめが、山臥にことづけて親のもとへもの申しけるは、おほかた地獄の苦しみは、たとへを取るとも、百千万億の中に一も申しのべがたし、とぞいひおこせける。されば、仏も地獄の苦しみをくはしくとるは、聞かんものみな血をはきて死ぬべし、とぞのたまひける。

まづ、地獄のありさまをいふに、天には七重の網をはり、地には鉄城かたくとぢたり。熱鉄さかんにして、四面に刀林のやきば鋭くして、阿防羅刹のいかれるすがた見るに心まどひ、牛頭・馬頭のはげしきこゑ聞くにきもをうしなふ。天にあふげば、つるぎの林の葉ふりくだりて、まなこをさしやぶる。地

にうつぶせば、猛火燃え出でて口に入る。なかむとすれば涙おちず。さけばんとすれども、こゑ出でず。須臾刹那の程も、くるしみならぬ隙なし。されば無隙とは、ひまなしとかけり。一日ならず、二日ならず、無量無数劫の間、くるしみを受く。一種ならず、二種ならず、百千万のかなしみしのびがたし。阿鼻大城のくるしみ、なかなか申すにをよばず。さかさまにおつる事、二千年なり。地獄のふかき事はこれにて知るべし。このくるしみを受くる間は、一中劫なり。一劫と申すは、たかさ四十里、ひろさ四十里の石を、三朱の天衣とて、きはめてかろき天の羽衣にて三年に一たびづつなづるに、紙一枚のあつさほどつぶるなり。これをみなでつくしてある時を、一劫といふなり。[75] この間苦患をうけん事、申すもなかなかおろかなり。

されば、金峯山の日蔵上人、無言断食しておこなひけるあひだに、秘密瑜伽の鈴をにぎりながら、死に入りたりけるに、地獄にて延喜の帝にあひたてまつりければ、御門のたまひけるは、地獄に来たるものはかへる事はなけれども、なんぢはよみがへるべきものなり。我、父の寛平法皇の命をそむきたてまつる。無実によつて菅原右大臣を流したりし罪のむくひに、地獄におちて、苦患をうく。このよしを我が皇子にかたりて、このくるしみをすくふべし、とおほせければ、かしこまりてうけたまはりけるを、御門のたまひけるは、地獄にては罪なきものをもつて、あるじとす。上人われをうやまふことなかれ、とおほせありけるこそ、いとかなしくはおぼえ侍りけり。されば、高岳の親王、かくぞよみ給へる、

24いふならく奈落のそこにおちぬれば刹利も首陀もかはらざりけり

この歌おもひあはせられて、あはれなり。地獄のゑ、かきたる屏風を見て、和泉式部がよめる、

25あさましやつるぎの枝のたはむまでこはなにのみのなれるなるらん[76]

（二七）

6　六道　二　餓鬼道

第二に餓鬼道と申すは、無量の苦患隙なしといへども、とりわき飢饉のうれへ、しのびがたし。[77] 得尸羅城の餓鬼は、五百歳の間、食ひ物をえずして子を飢やし、獅子国の餓鬼は、七どまで海の山になりかへるあひだ、食ひ物の名をきかず。みづから脳（なづき）を食らひてうゑをたすけ、あるいは子を食らひて命をつぐ。されば、

我夜生子随生皆自食

ととける。この経文のこころは、われよるごとに子をうむ。うむにしたがつて、みなみづから食らふなり。くはしく像法蔵経にとけり。木のみを見てとらんとすれば、つるぎとなり、水を見てのまんとすれば、ほのほとなる。腹の大なる事は、大海のごとし。須弥山を食らふとも、あくべからず。口のせばき事は、針の穴のごとし。芥子をのむとも、入るべからず。経論には人間にも餓鬼はありといへり。貧窮なる人をいへるか。祐盛法師が歌によめる、

26河をみて飲めばほのほとなるものをいづくをさしてやせ渡るらん

6　六道　三　畜生道

第三に畜生道と申すは、[78] 残害のくるしみ忍びかたし。大象、地にたけれどもいまだ獅子のおそれをまぬかれず。毒龍、海にわだかまれども、[79] なほ金翅鳥の難をはなれがたし。雉は、鷹のためにとられ、蛙

は、蛇（くちなは）のためにのまる。猫のまへの鼠、鵜のさきの魚、いづれか残害をのがるべき。長きものは短きをのみ、大なるものは小さきを食らふ。しかのみならず、鷲は、羽のために殺され、虎は、皮のために命をうしなふ。但念水草のたぐひは、重き荷を負ひて坂にむかひ、五百由旬の蟒（やまくぐち）の身は、小さき虫のために食らはるる。蒼海の魚は、暗きをいとひて出離をもとめ、雪山の鳥は、ひかりにあひて無常を観ず。あるいは色にふけりて命をうしなひ、あるいは蛛の家にかかりて身をほろぼす。総じて三十四億種のすがた、一つとしてくるしみをうけずといふ事なし。ことに畜生道にむまるるものは、出づる事かたし。そのゆゑは、犬になりぬれば、おほく須弥のごとく、かばねのつもるまで犬となり、鳥となりぬれば、過去八万劫がさき、なほ八万劫、未来八万劫のすゑ、また八万劫、鳥となるゆゑに、生をたくはふるとかきて畜生とよむなり。されば、高遠の大貳、畜生道へ堕ちぬるよし、子の夢に見えけるが、よめる歌こそあはれなれ。

27おく山の行へもしらぬ谷そこにあはれいつまであらんとすらん

6　六道　四　修羅道

第四に、修羅道と申すは、嗔恚さかりにして悪心冷むる時なし。一日に三時のたたかひあり。天鼓自然鳴[80]のなげきあり。くはしく申すにおよばず。

諸阿修羅等　居在大海辺　自共言語時　出于大音声

といへり。この文の心は、もろもろの阿修羅大海のほとりにありて、みつからともにいひかたらふ時、

（二九）

大音を出してせめたたかひ、苦しみを受くるなり。天鼓自然鳴[81]のなげきこれなり。

6　六道　五　人道

第五に、人間と申すは、我等衆生の事なり。寿命経には、八十六の苦しみをあかせりと申せども、常には八苦とぞ申すなり。八苦といふは、生と老と病と死と怨憎と愛別と求不得と五盛陰となり。

6　六道　五　人道　1　生苦

されば、一に生苦は、人母の腹にやどりて、三百日あるいは二百六十日、業の風に吹かれて初めて生まれ出づる時は、生きたる牛の皮を剝ぎていばらの中に追入るるがごとし。また、ふすまをもつてうけとるといへども、百千のつるぎをもつてきりさくがごとし、といへり。このゆゑに、あか子のはじめて泣く声は、苦かな苦かな、といふなり。

6　六道　五　人道　2　老苦

二に、老苦と申すは、さきにも申したりしごとく、年月つもりぬれば、老い衰へて、黒き髪は白くなり、色かじけて腰かがまりて、立ち居心にまかせず、子にも人にも隔てられ、心をのぶる事もなし。散

り残りたる花の風を待つがごとし。

6　六道　五　人道　3　病苦

三に、病苦と申すは、四百四病一としてやすき事なし。かしらねつし、身ほとほり、胸さはぎ、腹膨れ、いづれかたえて忍ぶべき。しかのみならず、子病めば同じく親も病む。女病めば同じく夫も病む。五百身分の痛きのみにあらず、物の心細く命の惜しき苦しみのそふなり。その心、贈皇后宮の歌に、

28むねにみつ思ひをだにもはれずしてけぶりとならん事ぞかなしき

また、病大事になりて、蟬の鳴くを聞きて、梅壺の女御、

29明日までもあるべき物と思はねば今日日ぐらしの声ぞかなしき

また、病大事になりて、月のあかかりけるをみて、藤原の堅子、

30いにしへは月をのみこそながめしに今は日をまつ我ぞかなしき

病大事になりける頃、雪のふりけりれば、良暹法師、

31おぼつかなまだ見ぬ道をしでの山雪ふみ分けてこえんとすらん

病大事になりければ、法師になりて、刑部卿範兼、

32はかなしなかしらの雪はきえはててたまたまのこる露の我がみは

病はまことにたへがたく、忍びがたき事なれ。国王大臣もところをおかず。冷泉院・三條院なども、御病ゆゑにこそはやく位をおりさせ[82]給ひけれ。承暦の頃、天下に世の中うちおこりて、一人もなくたは[83]

（三一）

（三二）

ぶれふして侍りけるに、但馬守国高、神拝しに下りけるに、[84]子のありけるが、親のともにくだりけるに、ある宮にわらはなるはしたものありけるを、心ざし深くおもひけるが、病つきけるよし[85]をつたへききて、とる物も取りあへずのぼりて、さぶらひける宮をたづねければ、人の忌む病なれば、知る人もなし。おほかた朱雀門のあたりへ出だされにき、といふ事ばかりを聞きて、心うく、かなしくて、やがて朱雀門に行きて見れば、しかじかとそれとはおもはねども、薦（こも）と[86]いふもの引きまはして、しつらひける中に、うつくしかりきみどりの髪はちりあくたにむすぼほれ、きたる物には血うちつけ[87]て、両のめを烏に抜かれて木の節の抜けたるやうにてありけるを、よくよく見ればかの女なり。心うく、かなしくて、三井寺[88]へ行きて、出家しておこなひけり。

されば、病にやつれぬれば、美しき人もなきなり。わが心にまかせたる恋の病さへしのびがたきものなり。右大弁親宗の歌、

33紅の恋の涙のいかなればはては朽葉に袖のなるらん

また、貪嗔癡の三毒の病といふ物あり。耆婆・扁鵲が療治もおよばず、まづしきものは、よろづの物をもとめ、人の物をほしがり、わが物ををしむなり。これを貪苦といふなり。昔、一人の長者あり。名をば刀提耶といふ。金をおほくたくはへてもちたりけるが、おき所を妻子に知らせず、今生の縁つきて後、犬にむまれてこがねのあるあたりをありきけれども、妻子ども同体とはしらずして、にくみて打ちたたく事、生生世世のかたきのごとし。ながく出離なくして苦患をうく。

されば、経の文に、

諸苦所因　貪欲為本

とき給へり。この経の心は、もろもろのくるしみのよるところは、貪欲をもつて本とするなり、とのたまへり。一切の悪業のみなもとは、ただ貪欲の心よりおこるなり。これをよくよくつつしむべし。

次に嗔といふは、はらをたて、心にいかりをなす事なり。仏、霊山のこけの庭にして御説法ありしとき、一人の龍王、法座につらなる。仏、過去の流転をかがみてのたまはく、汝昔一念の嗔恚によりて大蛇の報を受けたり。今そのかたちをあらわして汝に嗔恚の罪を知らせん、とおほせありければ、仏眼の力によりて二万由旬の大蛇のかたちをげんず。これのみならず、一生涯の間つくれる所の功徳・善根、須弥山のごとくなりといへども、一念の嗔恚をおこせば、善根のたきぎ嗔恚の猛火にやきうしなはる、といへり。この病いかにも療治すべきなり。

次に癡といふは、愚癡にしておろかなるをいふなり。愚癡なれば仏法の名字もきかず。されば、因果のことはりも知らず。されば、善根をもわきまへず。されば、貪欲・邪見にもはばからず、破戒・罪業にもおそれず。このゆへに、大地獄に堕ちて生々世々に苦を受くる。

昔、一人の愚者あり。父をつれて道を行くに、木陰にやすむに蚊といふ虫、父の額にくひつきたりけるを、大きなる棒にて蚊をうちける程に、親ともにうち殺しけり。親を殺さんとはおもはねども、愚癡なるによりて逆罪を犯しけるなり。四百四病はただ一生の間の病なり。貪嗔癡の三毒の病は生生世世の病なり。このたびよくよく療治して長き世の病を離れ給ふべきなり。

（三三）

6　六道　五　人道　4　死苦

第四に、死苦と申すは、一切の苦しみいづれも忍びがたしといへども、ことさら死苦をもつて第一とするなり。八万四千の塵労門より大毘嵐風といふ風吹き来たりて、四十四のつぎめごとにもろもろの病せめ来る。舌すくみ眼かへり、いはんと思ふ事もいはせず、見んとおもふ物をも見せず。定業かぎりあれば、神に祈れどもしるしなく、仏になげけどもかひなし。永保・雅忠[89]が薬もかなはず。保憲・清明がまつり事も[90]いたづら事なり。死苦の忍びがたきのみならず、よろづについてこの世の離れがたく、親しきをも疎きをもいはず、あひみる人ごとに名残りをしき苦しみのあるなり。かりそめにほかへ行きて、やがてかへらん事も、わが心にまかせたる道さへ、家をたち出づれば名残りをしきならひなり。いはんや、いまだ夢にも見ぬいかなる世界、いかなる国へおもむきて、いかなる目にかあはんずらんも知らぬに、一日かた時も離れがたき恩愛をふりすてて、ただ一人さし出でてゆかん心の中、おしはかり給ふべきなり。今生の縁つきぬれば、おもてをならべし親子なれども、おそろしきすさまじき心出で来て、はやくすてん事をいとなむなり。

されば、孟嘗君が三千の友、冥途の旅にはともなはず。石季倫が二千の友も、生をへだつればあふ事なし。一人中有の闇路にむかひ、さまざまの苦患を受けて、閻魔庁にいたりて罪の軽重をたださるる時、罪なきよしを陳ずれども、浄玻璃の鏡にくもりなくあらはるれば、つくりし罪を悔いかなしみて、娑婆世界の親子親類を見ていかがすべきとおめきさけべども、生をへだつれば見ゆる事なくして、こたへとぶらふものもなし。ただいたづらの独り言にて、つひになさけなき獄卒の手にわたさるるなり。ここを

もつて大集経には、

妻子珍宝及王位　臨命終時不随身　唯戒布施不放逸　今世後世為伴侶

とあり。この経文の心は、妻子珍宝及王位は命の終わりに臨む時は身にしたがはず、ただ戒と布施のみぞ今世後世の友となりぬる、ととき給へるなり。また摩訶止観には、冥々[91]として独り行く、たれか是非をとぶらはん。あらゆるところの財宝、いたづらに他のために[92]あり、ととかれたり。また倶舎論には、

再生汝今過盛　至衰承近焔魔王　欲往前路無資粮　求住中間無所心

とあり。この心は、たまたま生まれて汝は盛り過ぎ[93]ぬ。衰ふるにしたがひて閻魔王にちかづきぬ。さきへゆかんとすれば旅のかてなし。中の間に住まんとすれば身の置き処なき、とあり。[94]されば、閻魔王のつかひは高きをも貴きをもきらはず、魂をうばふなり。獄卒はかしこきをもおろそかなる[95]をもえらばず呵責するなり。

されば、大国の堯・舜の賢王も名のみのこり、日本の延喜天暦のひじりの御門も影をだにもとどめ[96]給はず。いはんや月卿雲客においてをや。楊貴妃・李婦人のたへなりし姿を見ても牛頭・馬頭はなさけをのこさず。衣通姫・小野小町がやさしかりし心にも、獄卒ははぢず。秦始皇が虎狼の心ありしも、梁の武帝がいさみのたけかりしも、頼光・頼信[97]がはかりごとのかしこかりしも、維衡・致頼が人におぢられしも、一人とどまる事なし。皆三途の故郷にかへりにき。天にのぼり、海にいり、市にまじはり、山にうづもれ、神通方便をえたりし四梵士もつひに死苦をまぬかるる事なし。この心をよめる歌[98]、

34さりともと八重の塩路に入りしかど底にもおゐの波は立けり

西へ入る日は東にかがやき、春北へとぶ雁は秋南へ来たり、むまるる人はかならず死しての後[99]、ふたた

（三五）

びかへる事なし。かばねはのこりて、よもぎがもとに朽ち、魂はひとり冥途の苦しみを受く。心あらん人、たれかこれをかなしまざるべき。この心を、源順が歌によめる、

35草枕たびとはたれかいひおきしつひの栖はみ山なりけり

僧都源信が歌、

36人の身を夢[100]の命といひけるはつひには野べにおけばなりけり

また、よみ人しらず、[101]

37皆人の命を露にたとふるは草むらごとにおけばなりけり

覚盛法師がよめる、

38思ひきや君が栖をそれぞとてよもぎが本をきつつみんとは

左京大夫あきのり[102]がよめる、

39野辺見れば昔の人やたれやらんその名もしらぬ苔の下かな

6　六道　五　人道　5　怨憎会苦

第五に、怨憎会苦と申すは、よろづにつけてうらめしき事を申すなり。花を見れば風に散り、月を見れば雲に隠れ、いづれもかやうの事なり。この心を素性法師が、

40花ちらす風のやどりはたれかしるわれにをしへよ行きてうらみん

宇治忠信が女のよめる、

41月影の入るををしむもくるしきに西には山のなからましかば
僧正けんかく[103]がよめる、
42ながむれば月かたぶきぬあはれわがこの世の程もかくばかりこそ
されば、恋しき人のおなじ心ならぬもせつにうらめしくて、徳大寺[104]左大臣実能がよめる、
43夢にだにあふとは見えよさもこそはうつつにつらきこころなりとも
中納言さねいへ[105]がよめる、
44いとはるる我身ならずはいかにして人のつらさを思ひしるべき
男のものおもふ[106]さへかくのごとし。まして女は心ふかきものなれば、愛執をとどめて、おつとをうらむる事あり[107]。返す返す罪深くぞ侍りぬる。中宮上総がよめる、
45さきの世の契りをしらではかなくも人をつらしと思ひけるかな
周防の内侍がよめる、
46契りしにあらぬつらさもあふ事のなきにはえこそうらみざりけれ
藤原のなりつねが母[108]のよめる、
47さのみやは我が身のうきになしはてて人のつらさをうらみざるべき
よみ人しらず、
48よしさらば心のままにつらかれよさなきは人のわすれがたきに
しかのみならず、北野の天神は筑紫に[109]流されぬ。もろこしの一行阿闍梨、掛羅国へ流され給ひき。これみな怨憎会苦の法なり。

（三七）

6　六道　五　人道　6　愛別離苦

第六に、愛別離苦と申すは、わかれををしむをいふなり。前世[110]よりの宿習なれば、あるいは年久しくちぎり、あるいは新枕めづらしくて、愛執ふかく思ふゆゑに、更に行きかね、明け行く鳥のこゑを夢にもいとど心まどひて、むつごとつきせざるをば、あかつきの別れと申すなり。[111]源頼綱がうたに、

49いにしへの人さへけさはつらきかなあくればなどかかへりそめけん[112]

また、人めしげき中の一夜をだにもあかさぬを、よひの別れといふなり。藤原為忠がよめる、

50よひのまにほのかに人を三日月のあかで入りにし影ぞ恋しき

鬼界が嶋に侍りけるころと、風のたよりに、いまだいきたるよし、母のかたへ申しつかはすとて、沙弥少将康頼[113]、

51さつまがたおきの小嶋に我ありとおやにはつげよ八重の塩かぜ

これらはいきてのわかれなれば、まだあひ見る事もありぬべし。ただ長き別れこそかなしけれ。[114]老少不定のさかひなれば、おやにもおくれ、子にもおくれ、妻にもわかるる、[115]おつとにもさきだち、主にもさきだちぬる人おほし。母におくれて、せちになげきて、顕昭法師がよめる、

52たらちねやとまりて我をおしまましかはるにかはる命なりせば

子にわかれて、高岳頼言がよめる、

53人のうへと聞きこし物をしでの山わがこの道にまよひぬるかな

一条殿の伊尹[116]の御子に、前少将挙賢[117]、後の少将義孝とて、時めき給ふ公達おはしましき。もがさをわ

ずらひ給ひて、はかなくならせ給ひにき。おやの御心の中、いかばかりかなげきおもひ給ひけん。おとときみはもとより道心おはせし人にて、世尊寺の梅の木の本にて、つねに命終決定、往生極楽、といふかねをつき給ひけるに、あはせてたのみ給ひたりける雅円[118]阿闍梨と申す僧の夢に、心ちよげにて、かくぞ見えける。

54時雨こそ千種[119]の花はちりまがふ何ふる里に袖ぬらすらん

また、村上の御門かくれさせ給ひてのち、あまりになげき給ひけるにや、れいならず成りたまひければ、かくぞよみ給ひける。斎宮女御、

55おくれてもこえける物をしでの山さきだつことを何うらむらん

一条院御かくれの後、のちの一条院なにともしらでまぎれありき給ひけるを見て、上東門院よみ給へる、

56みるからに露そこほるるおくれにし心もしらぬなでしこの花

中納言実綱かくれ給ひにければ、やがて尼になりて、五月五日に三河内侍よみ給へる、

57あやめ草あらぬうきねを引きそへて涙ぞかかる墨染の袖

としごろのつまにおくれてよみける、藤原基俊、

58おもひやれむなしき床[120]を打ちはらひ昔をこふる[121]袖のしづくを

主にわかるる[122]、ことにかなしくぞ侍りぬる。賢人、二君につかへずとて、ながく世をそむく人おほくぞ聞こえける。

深草の御門かくれさせ給ひければ、良峯宗貞とて、蔵人のかみなりける人、やがて法師になりて、笠

（三九）

置といふところに、みのといふ物うちしきておこなひゐければ、人あまたぐしたりけるものまゐりて、じゆずを一時ばかりすりて、行くゑなく出でにし人に、今一たびあはせてたび給へ、といふ声をきけば、我が妻のこゑにききなして、[123] あまりにあはれにて、ここにあるとていづべく思ひけれども、心よはくては仏道修行はかなはじ、と思ひかへして、あかつきがたにかへるを見給へば、九つになるをなごをばさきにたて、五つになるをのこごをば、めしつかふたちはきといふものにいだかせて行くを見るに、かくれはつべきともおぼえざりけれども、つひに名のりて出づる事なし。さて、残りの公卿・殿上人は、御はてとて、墨染などぬぎすてて、いろめきわたるよしをききてよめる、

59みな人は花のころもになりぬなり苔のたもと[124]よかはきだにせよ[125]

また、上野峰雄といふもの、別れをなげきけるころ、見なれたる桜のもとにてよめる、

60深草の野辺の桜し心あらばこの春ばかり墨染に咲け

草木心なしといへども、物あはれをしればこそ、その春はすみ染めに咲けるとなん。いまに深草の墨染桜とてあり。また師匠にわかるるくるしみ、いとあさからずぞ聞こゆる。されば、釈尊、八十年の化縁つきさせ給ひて、御入滅ちかくならせ給へば、摩竭陀国より拘尸那城へおもむき給ひし時、栴檀みなかれはて、菩提樹の菓おちて沙羅林のかぜさびしく、跋提河の浪すさまじくして、十六羅漢、五百の大弟子、十六の大国の王、九万三千[126]の衆生一つ心にかなしみ非情[127]草木もうなだれ、悲哀の色見え、五十二類もあしをあがき羽をたれて、うれへにたへける。この時、憍梵婆提の大師入滅、我随入滅、とて水に成りてうせ給ひぬ。迦葉尊者の御滅後にありて、[128] おめき給ひしこゑ、三千世界にきこえけるなげきあさからずぞおぼしける。[129] 生ある物、かならずをはりあり。あひあふ物はかならずわかれあり。これを愛別離

苦とはいふなり。六通三明をさとり給ひたる釈尊さへ、[130]このくるしみをばまぬがれ給はず。いはんや濁世の凡夫にをいてをや。いかでくるしみをのかるべき。この心を、[131]朗詠の詩にも作れり。

生あるものはかならず滅す。釈尊いまだ栴檀のけぶりまぬがれ給はず。たのしみつきてかなしみ[132]来たる。天人なほ五衰の日にあへり。

6　六道　五　人道　7　求不得苦

七に求不得苦といふは、よろづ[133]物をもとむるにえず。心にかなふ事なし。遅遅たる春の日、けぶりたえで、くひ物のたぐひをもとむるにえず。れいれいたる冬の夜、衣をうる事なくして、寒天を明かしがたし。[134]衣食の二事にともしきものは、[135]かならずよろづののぞみ心にかなはず。されば、うつくしかりける子をすてたるに、きる物にゆひつけける、

61身にまさる物なかりけりみどり子はやるかたもなくかなしけれども

五月の長雨のころ、かがみをうりける女の、うらにかきつけたる歌、

62けふのみと[136]見るに涙のます鏡なれにし影を人にかたるな

世の中にすみわびて、夫婦和議してはなれけるが、女はよきに人のめに成りて、難波のかたへまかりたりけるに、おとこはあしをかりてうりければよめる、

63君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波のうらぞすみうき

これみな求不得苦の人のよめる歌なり。ここをもつて観世音菩薩は、一切衆生のねがひをみて、貧苦

（四一）

なる物をあはれみすくはんがために、菩薩の行をおこなひ給ふなり。その因縁おろおろ申すべし。[137]昔、父をば長那といふ、[138]母をば摩那斯羅女といふものありき。[139]二人の子をもちたるなり。[140]名をば早離・速離といふ。無常をまぬかれずして母摩那斯羅女、やまひをうけてうせぬ。父の長那、かなしみけれども世の中のならひなれば、また妻をまうけたり。かかりけるほどに、天下に[141]飢渇行きて、人みなかつゑ死にければ、長那、二人の子を継母[142]にあづけて檀那羅山へ行きぬ。一つくひぬれば七日物ほしがらぬこのみありと聞きて取りに行きたりける。跡に継母[143]、早離・速離を舟にのせて、みるめ刈れといひて島にはなちける。そのとき二人の子、かなしみの涙をながしてちかひをたてていはく、[144]一切の衆生の貧苦ならんをたすけ、よろづの苦をすくはん、といふ願力により給ひて、早離・速離は、観音・勢至と成り給ひぬ。母の摩那斯羅は阿弥陀如来と成り給ひぬ。さてこそ、おや子の契りなれば、阿弥陀の三尊とは申しけれ。その時はなたれし島は、今の補陀落山なり。これはただいへるにあらず。経文にまかせていへり。[146]

昔、天竺国に王あり。[147]象を飼ふ。毎日に[148]百石の白米を飼ふなり。折ふし一人の羅漢、象に向つていはく、[149]象はかしこし。我はかなし。我はかしこし、象はかなし、といひてさりぬ。これを聞きて、象、物をくはず、たふれふしてありけり。[150]象飼ふもの、この事をおほやけにかたり申しければ、[151]羅漢の呪詛したるなんめりとて、羅漢をめして、このゆゑをとひ給ひければ、羅漢のいはく、むかし、象と我とは[152]同朋なりし。しかるに象は聖教のことはりをしらず、施を行ぜし[153]ゆゑに、今畜生にむまれたりといへども、毎日に百石の米をくふ。我は経論をさとりし[154]がゆゑに、人界に生れたりといへども檀婆羅蜜を行ぜざりしゆゑに、一鉢をむなしくして食[155]をえがたし。この事を象にむかひて申しつるなり、とぞのたまひける。

されば、一切の衆生の苦は、みな前世のむくひなり。仏の御弟子、羅旬比丘は、頭陀をすれども食[156]を

えず。また目連の御弟子、利堀尸は、乞食を[157]すれども鉢をむなしくす。吾が朝、延暦寺の安然和尚は、根本中堂の薬師仏と物がたりし給ひしほどにたつとき人なれども、食をうる事なかりしなり。つねに土などをくはれける[158]なり。されば、貧苦は人にはよらぬ事にてぞ侍りぬる。堯の代に、九年雨ふりて、日のかげを見ざりしも、湯[159]の代に、七年日てりて雨のうるほひをえざりしも、吾が朝の長承の飢渇におほくの人ども死にうせたりし事も、みな求不得苦にあひしなり。しかじ、生死をいとひ、菩提をせうじてこのくるしみにあはざらんには。

6　六道　五　人道　8　五盛陰苦

八に五盛陰苦といふは、よろづにつけて物のおそろしくあやうきなり。国王は仏天にをそれ給ふなり。天変大地震すればあやしみをなし、臣は龍顔におそれたてまつり、舟にのるものは悪風海賊にあはじと思ひ、山を行くものは山だちにあはじとつつしみ、病をうけじとたしなむ。されば、法花経に、

三界無安　猶如火宅[160]

とのべ給ふなり。この心は三界はやすき事なし。なほし火のいへにいるかごとしとなり。しかれば、[161]三界火宅は龍のひげをなづるがごとく、五趣輪廻は虎の尾ふむにたり。しかのみならず、世の中にありふるならひにて、人の身にしたがひて、かたきといふものあり。おやのかたき、宿世のかたき、その外よろづにつきてのかたきは、かぞふるにをよばず。されば、おそるる事、生生世世にたゆる事なし。返す返すこれらの苦をのがるべきなり。のがるるといつぱ、たとひ人われをころさんとするとも、我はそ

（四三）

の人にうらみをなすべからず。あだをば恩をもつてほうずるといふ本文あり。この心をさとらざる人は、生生世世のかたきをまねくなり。われ人をうしなへば人またわれをほろぼす。されば、経の文に、あだをほうずれば、あだつひにつきせず。とくをもつてあだをほうずれば、あだつひにつきぬ、とのべ給へり。これらのくるしみかぞへつくしがたし。これを五盛陰苦といふなり。

6　六道　六　天道

第六に天上と申すは[162]、快楽の数をつくしがたしといへども、五衰とて五つのくるしみをまぬがれず。この五つの苦は花[163]のかづらしぼみ、わきの下よりあせいで、二つのまなこまじろぎ、天衣あかつき、飛行心にまかせず、ひとり林の間にすてられて、あふぎふしてかなしめり。つひに命おはりて、すなわち、大地獄におちて、無量の苦患をうく。善現城はすみよかりしかども、阿鼻大城はすみにくく、劫婆羅樹のもとは、涼しかりしかども、刀林の木の下は忍びがたし。身、ししむらをきりやぶりき。帝釈の宝座には[164]、居よかりしかども、熱鉄の床の上にはふしにくかりき。衆車苑の車はのりよかりしかども、火焔の車はのりにくかりき。白玉の軟石[165]は、なつかしかりしかども、衆合の石は身をせめけり。殊勝池の水はあびよかりしかども無間のかまの湯はあつかりき。四種の甘露はあまかりしかども、熱鉄のまろかせはくいにくかりき。五妙の音楽は心すみしかども、毒蛇のほゆる声はおそろしかりき。飛行の天衆はあそびよかりしかども、阿防羅刹は情もなかりき。ここをもつて正法念経に、

天上欲退時　心生大苦悩　地獄衆苦毒　十六不及一

とき給へるなれ。[166]

7　十二門開示

されば、仏は、返す返すこの六道をめぐりありき給ひて、ひとつも苦ならぬ所なし。はやく生死をいとひはなるべし、となり。かやうにかたりければ、この女、なげき[167]ふかきけしきにて、かたはしをのたまへるをきくにさへ、血をはき死なんずるやうにおぼゆるなり。いはんやめいどのみちにおもむき、まことのくるしみをうけんにおいてをや。いかにしてかこの六道をはなれ候ふべき、といへば、この僧、仏にならざらんかぎりは、いかでかはなれ給ふべき、といふ。この女、仏にはいかにしてなるべき、と申せば、仏になる事やすし、とも申しつべし。また、かたし、とも申しつべし。仏になることのかたければこそ、無始生死より億億萬劫のあひだに、おほくの仏の出世の利益に漏れて、もろもろの衆生、六道には沈淪すれ。法花経の六のまきにも、

このもろもろの罪の衆生は悪業をもつて三宝のなをもきかず

とのべ給へり。されば、仏になる事はかたきなり。しかれば、天台宗の心をうけ給へる時は、非情草木も仏となれり。いはんや女人もきらはず、見仏聞法の国にむまれて、仏道をねがはんにいかでか成仏せざらん、といへば、このおんな、女人は五障あるがゆゑに成仏に漏るべきやうにうけたまひしに、[168]女もつひに仏となるべきにてあるこそめでたけれ。なに事をつとめをこなひてか仏になりさふらふべき、[169]ととへば、仏になる道は一にあらず。たとへば、王宮[170]まゐるに、人のこころこころによりて入るがごとし。

（四五）

極楽浄土に往生する道もかくのごとし。十二門をたてて申すべし。
第一に道心をおこして世をのがれ、出家すべし。
第二にふかく三宝を信ずべし。
第三に如来の禁戒をかたくたもつべし。
第四にもろもろの行業をつむべし。
第五に仏にならんと願をおこすべし。
第六に生生世世に[171]業障を懺悔すべし。
第七にもろもろの布施を行ずべし。
第八に観念をもつぱらとすべし。
第九に善知識にあふべし。
第十に臨終に悪念をとどむべし。
第十一に法花経をおこなふべし。
第十二に阿弥陀仏をたのみたてまつるべし。
されば、かみをそりおとすものもあり、またながくはやさんとするものもあり。かみへかきあぐるものもあり。しもへなでつくるものもあり。みなみなこのみこのみなり。されば、明君は松をあいし、楽天は竹を友とし、寧王はふえを吹き、楚王は琴をひく。人のこころはひとつにあらざるがゆゑに、十二の門をたてて申すなり。いづれにてもあれ、御こころのひかんかたをつとめ給はば、みな仏道にいたるべきものなれば、いそぎいそぎつとめをこなひて、仏に成りたまふべし。

1 秋のころ＝他六本「秋」、平三・大系「秋」、おう「秋のころ」
2 世の中もありしにもあらず。浮木にのりけん人の心ちせしかば＝他六本ナシ。平三ナシ。大系「世の中も有しにもあらず、浮木に乗けん人の心地せしかば」、おう「世中在シニモ非ズ、浮木ニ乗ケン人ノ心地シテ」
3 経ぬれば＝他六本「へければ」、平三「へければ」、大系「経にけれども」、おう「経ケレドモ」
4 何となく春のつれづれをなぐさめんと思ひて、いたづら事とも申し出で侍りつるに、げにや嵯峨の御釈迦こそ天竺へ帰りたまはんずるとて、一つ京の人院の宮をはじめまゐらせて、道もさりやらず参り侍るなれ、と申せば＝他六本、

なにとなく世の中もしづかならず、あさましきやうなれば、嵯峨の釈迦こそ天竺へ帰り給はんずる瑞相あれ、と語りければ、いとかなしくぞおぼえける。この御仏と申し奉るは、教主釈迦、正覚なり給ひて、御母のために報恩経を説きたまはんとて、忉利天にのぼり給ひしを、優闐大王のあなかしこにこひ奉り給ひて、毘首羯磨といふ人にあつらへて、赤栴檀をもつて御かたちをうつし給ひて、おがみ給ふほどに、仏一夏九十日はてて、天竺へ帰り給ふ時、栴檀の仏、金銀水精の橋のもとまで御むかひにまゐり給ひたりければ、仏ののたまはく、我は八十年の化縁つきて涅槃に入るべきなり。栴檀の仏は、末代の衆生を利益し給ふべき仏なり、とて御さきに立てて帰り給ひき。

この部分、底・上にはなく、他六本の他には平三に見える。ここでは、松井本を底本とした。

5 大系「何となく世の中も静ならずみゆる。げにや、嵯峨の釈迦こそ、天竺へ帰り給はんずるとて、一京の人、道も去あへずまいり侍るめれと申せば」、おう「無何ト世中モ不静ナラノミ見ル。ゲニヤ、嵯峨ノ釈迦コソ、天竺ヘ帰リ給ナンズルトテ、一京ノ人ドモ、道モサリアヘズ集リ侍ルメレト申セバ」。「げにや」以降は、ほぼ底本と一致する。
6 我日本の＝松・小「日本我朝の」、細・築「にほんわがてう」、宮「我てうの」、築「日本我かてう」
7 二十日ころに＝他六本「二十日に」、平三「二十日に」、大系「二十日の事なるに」、おうふう「二十日」
8 丘慈国（くじこく）＝大系・おう「亀慈国（きじこく）」
9 白純王＝底「はくそん王」、底、後に「白純王」とあるのによる。大系・おう「白純（びやくじゅん）王」
10 普闕といふ将軍＝大系・おう「兵」
さては二伝の仏にては、おはせざるなり＝大系「さては二伝の仏にこそおはしますなれ」、おう「サテハ直伝ノ仏ニコソ御座スナレ」

（四七）

11 寺僧とおぼしきもの～（4　宝物の論）とて侍るほどに＝釈迦像伝来の由来を詳しく説くこの部分、他六本、平三ナシ。（但し、天竺での釈迦像作成の過程を語る「教主釈尊、正覚なり給ひてのち～とて御さきにたててかへり給ひき」までは、他六本と類似している）。大系・おうの本文に似るが、「おう」により近い。

12 さはぎて＝底「さはひて」、萩により改む。

13 やうやう＝他六本ナシ。平三ナシ。このあたり、大系「漸夜深しままに、老たる尼法師や、あやしの下衆共などはいねける成べし。心有計の者共目を覚して」、おう「漸ク夜打フクル程ニ、アヤシキ下衆ヤ、老タル尼ナンドハ寝ニケリ。物ノ心有人計リ目ヲ覚シツツ」

14 あやしの下守＝他六本ナシ。平三ナシ。

15 ものの＝松・小・細・宮・萩ナシ。平三ナシ。

16 とられて＝底「とれて」、他七本により改む。

17 稲麻経＝宮「たらまきやう（陀羅摩経）」、大系・おう「稲稈経」

18 はくべき＝他六本「うべき」

19 つくづく＝他六本「つらつら」

20 なり＝他六本「かはり」

21 なり＝他六本「かはり」

22 太天王＝大系「天竺の大天皇」・おう「天竺の国王」

23 優陀延＝宮「ゆたゑん」

24 江湖の＝他六本「江湖に」

25 昔は京洛のはなやかなる客たり。今は江湖のおちぶれたる翁となれり＝萩「昔為京洛声花客、今作江湖隙例翁、老眠早覚常残夜、病力先衰不待年」

26 かへらねど＝松・小・細・簗「かはらねど」、宮・萩「かわらねど」

27 かつがつ＝他六本「かずかず」

28 師走の＝他六本「師走に」

29 伯瑜＝宮「はくゆう（伯有）」

30 木＝小「木。母」、宮「木ざう（像）のはゝ（母）」
31 郭巨＝松「郭居」
32 きざみ＝他六本「きざみて」
33 さむかるらん＝松・細・簗・萩「さむからん」
34 みききせぬ＝他六本「みささげぬ」、大系「あざらけき」、おう「あたらしき」、平三「生なる」
35 とぼして＝他六本「ともして」
36 形は破れて他郷の灯の鬼となる、争か旧里にかへりてこの身をすてん＝大系・おう「我是日本花京客、汝即同姓一宅人、為父為子前世契、隔山隔海恋情悲、経年流涙蓬蕎宿、逐日馳思蘭菊親、形破他州成灯鬼、争帰旧里寄斯身」
37 けり＝松・小・細・簗・萩「ける」
38 僧＝大系・おう「実源律師」
39 みなもとのありつねの中将＝大系・おう「源有房中将」
40 中納言＝大系「藤原成範」
41 苺＝松・小「苔」、細・簗・宮・萩「こけ」
42 行くらん＝大系・おう「朽ちなん」
43 人と＝松・小・簗・宮・萩「人」
44 むくひ＝松・小・簗・宮・萩「ほう」
45 のたまひけり＝松・小・簗・宮・萩「のたまひける」
46 太子にして＝松・小・簗「太子にて」、太子にしておはしましける＝宮「太子たりし」
47 悲しむ＝松・小・簗・宮・萩「かなしむは」
48 ひが事に＝松・小・簗・宮・萩「ひが事には」
49 人の身は＝松・小・簗・宮・萩「人は」
50 りうはくせい＝宮「りうはくりん」振漢字「劉伯倫」、大系「劉成」に対し「劉阮」の誤りと注す。おう・平三は「劉晨」

（四九）

51 はなやか＝松・小・簗・宮・萩「わかやか」
52 つねに＝松・小・簗・宮・萩「我つねに」
53 引きて遊ばん＝松・小・簗「引きてぞあらまほしき」、宮「ひきてそあらまほしとそ」、萩「ひきてそあらまほしと」
54 修行して＝他六本「修行したく」
55 増長＝おう「充満」
56 能くこの法を聴かんものは＝底「きかんものは」、松・小・細・簗により補う。
57 なりとこそ説き給へされば金剛般若経には＝松・小・細・簗「なり少々その文を申へし」、萩「せうせうそのもんを申へし」、宮「せうせうそのもん申へしこんかうきやうの文に」
58 観ずべし＝他六本「観ずべしとなり」
59 滅して＝小・細・簗「めつしてすくなし」、宮「めつすすくなし」、萩「せうめつして」
60 仏果＝松・細・簗・宮・萩「くわ」
61 無言太子＝松・小・細・簗・宮「又」
62 三教指帰＝底「三考識」、上「三教指帰」、宮「さんかうのしき」に振漢字「三教指帰」、松・小・細・簗・萩「三かうしき」
63 おとろへ＝おう「大ニ驚キ」
64 憂へ＝底「これゑ」、他七本により改む。
65 針の＝他六本ナシ。
66 人界にむまるる事は、大海のそこにはりをしづめて、八万由旬の須弥山のいただきより糸をくだして、針のみみをとほさんよりもなほまれなる事なり＝この喩え、大系、おうに見えず。二巻本以外では、他に平三に「人界に生るる事大海の底に針をしづめて八万由旬の須弥山のいたたきより糸を下してみみをとをさんよりもなをまれなる事なり」とあり。
67 この後、宮「又ぢざうほさつの御歌とて人ぎんじけるあまりしゆせうなるままかきのせはんへる　わかきとてすゑなはるかにたのみそよむじやうの風はときをきらはず　されは」。宮本独自の歌にして、他の諸本に見えず。
68 されば、清少納言が枕草子に＝大系「清少納言枕草子には、『除目の聞書、赤子のむまれたる、おもはしき人の文』

などをだにおぼつかなきことには申ためれ。されば、心ある人、みなかくこそよみ侍るめれ。」に続いて、「よみ人しらず」の歌とする。おう「清少納言ガ枕草子ニハ、『除目ノ聞書、赤子ノ生レタル、思ハシキ人ノ文』ナンドヲダニコソ覚束ナキ事ニハ申テ侍ヌレ。サレバ、心有人、皆カクゾ読テ侍ベル。」に続いて、この歌ナシ。平三「されは清少納言が枕草子に赤子の生れたる老の行ゑなとおほつかなき事にかけるなれある歌に」

69 夢＝大系「露」

70 しり、仏法を修行す。しかりといへども、過去の罪業ふかきものは＝底「しるものは」、他六本により改む。平三もこれら六本に同じ。

71 仁和寺御室＝大系「入道法親王」

72 木のみも＝他七本「木の葉の」、平三・大系・おう「木の葉の」

73 萩はこの23の歌の後「又ある人の歌に　紅葉はをかせにまかせて見るよりもはかなき物は我身成けり」とあり。『古今和歌集』巻十六859大江千里「もみぢ葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり」

74 法華経に〜とかたりければ＝萩「ほけきやうにいわく、汝等舎利弗　声聞及菩薩　当地是妙法諸仏之秘要　以五濁悪世　但楽着諸欲　如是等衆生　終不求仏道　当来世悪人　聞仏説一乗　迷惑不信受　破法堕悪道　此もんのこころは、なんたちしやりほつ、しやうもんおよひほさつまさにしるへし。此めうほうはもろもろのほとけのひやうなり。五ちよくあくせなるをもつて、たたもろもろのよくをねかいもとめす。たうらいせのあく人は、ほとけの一てうをとき給ふをきひて、めいわくしてしんしゆせす、ほうをやふりてあくあくたうにおつへし、ときたまへり、とかたりければ」

75 第一に地獄といふは〜一劫といふなり＝萩、詳細な異文あり。八大地獄の一つひとつを『往生要集』によって詳しく述べる。

76 萩はこの25の歌の後「そうして、地こくは百三十六あり。その中にも、山のなるかみのほとりにも、地こくありとそ、くしやあんにも申ける。誠にさるやらん。ゑつちうの国、たて山の地こくより、あふみのくにゑちの大りやうといふもののむすめ、やまふしにことつてて、をやのかたへ申けるは、大かた地こくのくるしみは、たとへをとる共、百千をくの中にも一も申のへかたしとそ、いひおこせける。」とあり。

77 無量の苦患隙なしといへども、とりわき飢饉のうれへ、しのびがたし＝萩、詳細な異文あり。餓鬼道を『往生要集』

（五一）

によって詳しく述べる。

78 畜生道と申すは＝萩「畜生道をあかさばちうしよふたつあり。こんほんはたいかいにすむ。しまつはにんてんにましはれり。そうして三十四をくしゆのすかた一として、くるしみをうけすといふ事なし。しゆしゆのそうありといへとも三をいてす。一にはとりのたくひ、二にはけた物のるい、三にはむしのるいなり。」

79 わだかまれども＝他六本「わだかまるといへども」、平三「わだかまれども」

80 自然鳴＝松・小・細・簗・萩「しみやう」、上・宮「じみやう」

81 自然鳴＝上「自鳴」、松・小・細・簗・萩「しみやう」、宮「じみやう」

82 位を＝松・小「位をも」、細「御くらゐをも」、簗「御くらいをも」、宮・萩「くらゐをも」

83 をりさせ＝松・小・細・簗・宮「おりさせ」、萩「ハせ」

84 くたりけるに＝松・小・細・簗・萩「くたりけるか」、宮「くたりけるが」

85 つきける＝松・小・細・簗・宮「つきにける」

86 薦に＝他七本により改む。

87 つけ＝他六本「つき」

88 三井寺＝他六本「やがて三井寺」

89 雅忠（ちう）＝小によりて改む。

90 まつり事も＝松・小・細・簗・宮「まつりも」

91 冥々（めいめい）＝他七本「冥々（みょうみょう）」

92 ために＝底「ため」、他七本により改む。

93 汝は＝他六本「汝今」

94 あり＝他六本「なり」

95 おろそかなる＝松・小・細・簗・宮「をろかなる」

96 影をだにも＝他六本「影をだに」

97 頼光・頼信＝松・小・細・簗・萩「らいくわうほうしやう」、宮「頼らい光くわう綱つな保ほう昌しやう」

98 この心を読める歌＝平三「此心を歌にもよめる登蓮法師」

99 死しての後＝他六本「死して後」
100 夢＝大系・平三「露」
101 よみひとしらず＝大系「佐伯清正」
102 左京大夫あきのり＝大系「左京大夫修範」、平三「右京大夫あきのり」
103 けんかく＝大系「深覚」
104 徳大寺＝松・小・細・簗・萩「徳大寺の」
105 中納言さねいへ＝大系、僧都範玄の歌として「いとはるる我身ならずはいかにして人のつらさをおもひしらまし」とあり。
106 ものおもふ＝松・小・細・簗・萩「物をおもふ」
107 事あり＝松・小・細・簗・萩「事もあり」
108 藤原のなりつねの母＝大系「源盛経女」
109 筑紫に＝他六本「筑紫へ」
110 前世＝他六本「さきの世」
111 源＝他六本「されば源」
112 そめけん＝他七本「そむらん」、宮「また人めしげき」～和歌「よいのまに」ナシ。
113 沙弥少将康頼＝大系「沙弥性照」、おう「康頼入道性照」。
114 こそ＝他六本「のみこそ」
115 宮「妻にもわかるる」～「おほし」は「ふうふかいらうとうけつとちきりしかともこころにまかせさるわかれありしうにもわかれ師にもさきたつ又琴詩酒のともからいともからにもわかるゝく一にあらす」とあり。
116 伊尹＝底・他七本「これまさ」、大系「これのぶ」、おう「これただ」
117 挙賢＝底・他七本「よしたか」、大系・おう「挙賢（たかかた）」
118 雅円＝他七本「がゑん」、大系・おう「賀縁」
119 こそ＝他六本「とぞ」
120 床＝松・小・萩・宮「とこ」、細・簗「ゆか」

（五三）

121 こふる＝大系「忍ぶ」
122 わかるる＝他六本「わかるるは」
123 ききなして＝他六本「きゝなしつ」
124 ころも＝底「袂」にふりがな「ころも」、他六本「たもと」
125 たもと＝底「衣」にミセケチ「たもと」、他六本「ころも」
126 九万三千＝他六本「九万二千」
127 非情＝他六本ナシ。
128 ありて＝他六本「あひたまはて」
129 おぼしける＝他六本「おほえける」
130 釈尊さへ＝他六本「釈尊たに」
131 この心を＝底「此心」、他七本「此の心を」
132 かなしみ＝他六本「あはれみ」
133 よろづ＝他六本「よろづの」
134 明かしがたし＝他六本「あひすることなし」
135 ものは＝底「もの」、他六本により改む。
136 けふのみと＝大系「けふのみぞ」
137 因縁おろおろ＝他六本「因縁かつかつ」
138 長那といふ＝松・小・細・簗「ちやうな」、宮「ちやうなといひ」
139 ありき＝他六本「あり」
140 もちたるなり＝他六本「もちたり」
141 天下に＝底「天下」、他六本「天下に」
142 継母＝底ふりがな「けいぼ」、他六本「まゝはゝ」
143 継母＝底ふりがな「けいぼ」、他六本「まゝはゝ」
144 ちかひをたてて＝上「誓をたてゝ」、松・小・宮「ちかひて」、細「ちかついて」、簗「ちかつて」、萩「ちかいて」

（五四）

145 衆生の＝底「衆生、」他六本「衆生の」
146 いへり＝底「いへる」、他六本「いへり」
147 国に王あり＝他六本「に国王あり」
148 毎日に＝他六本「毎日」
149 向つて＝他六本「むかひて」
150 たふれ＝他六本「たはれ」
151 かたり申しければ＝他六本「かたりけれは」
152 我とは＝底「我と」他六本「我とは」
153 施を行ぜし＝他六本「せきようせし」
154 さとりし＝他六本「さとりたりし」
155 食＝底「しよく」、上・松・小「食」、細・簗「しき」、宮「じき」に振漢字「食」、萩「食」にふりがな「じき」
156 食＝底「食」にふりがな「しよく」、上・松・小「食」、細・簗「しき」、宮「じきもつ」、萩「食」にふりがな「じき」
157 乞食を＝底「乞食」、他六本「こつしきを」
158 くはれける＝松・小・細・簗「くはれけると」、宮「くはれ給ふと」、萩「くわれけると」
159 湯＝松・小・細・萩「やう」、細「たう」、宮「たう」に振漢字「唐」
160 萩、続けて「衆苦充満甚可怖畏」とあり。
161 萩「しかれば」～「ふむにたり」ナシ。
162 萩、続けて「三つあり一にはよつかい二にはしきかい三にはむしきかいなりそのそうすてにひろしつふさにのへかたし一しよあぐかのとうりてんのこときは」
163 この五つの～かなしめり＝萩、詳細な異文あり。
164 宝座には＝他六本「宝座は」、宮「宝座には～衆車苑の」ナシ。
165 軟石＝松・小・細・簗「けつせき」、萩「けんせき」、宮「白玉の軟石～あつかりき」ナシ。
166 萩、続けて長文の異同あり。
167 なげき＝松・小・細・簗「まことになけき」、萩「まことになさけふき」、宮「にはかになけき」

（五五）

168 うけたまひし＝他六本「うけたまはりしに」

169 ほとけになりさふらふべき＝松「ほとけに成候べき」、小「ほとけになるべき」、細・簗ナシ。萩「ほとけにはなりさふらふべし」、宮「ほとけになるへし」

170 王宮＝松・小・宮「わうぐうに」、細・簗・萩「わうぐうへ」

171 世世に＝松・小・宮「世々の」

宝物集下巻

7　十二門開示　一　道心

第一に、道心をおこし、[1] 出家遁世して、仏になるべしと申すは、これたしかの修行なり。万法は心のなすところにて、さらに別に法なし。発心をおこして浄土をもとむべきなり。永観法師は、人木石にあらず、このめばおのづから発心す、とぞおしへける。道心をおこさんものは、よき友にしたしむべきなり。栴檀の林に入る人は衣おのづからかうばしく、麻の中の蓬はためざるになほきなり。海にうかぶ舟は万里をすぎ、松による葛は千尺のこずゑにのぼる。されば、青蓮華世界の鳥は妙法をさへづり、このゆゑに道心あらん人にちかづきて仏道をねがふべし。法花経には、

不親近諸外道梵志

とのべ給へり。この心は、かりそめにもあしき友にちかづく事なかれ、よき人にしたしめ、となり。心は第一のあだなり。心は心をゆるすべからず。煩悩は家の犬、うてども門をさらず。心は山の鹿（かせぎ）、なつけどもしたがはず。心はあらき馬のごとし。しづめて道心をおこすべし。

7　十二門開示　一　道心　1　発菩提心の功徳

一念菩提心をおこせば、百千万の塔をつくるにすぐれたり、と申しぬれば、一念の功徳さえ無量なり。

（五七）

いはんや、ながく道心をおこして、ひとへに仏道をもとめんにおいてをや。されば、釈迦如来、華厳経の中におほくのたとへをとりて、菩提心の功徳をとき給へり。たとへば、善見[2]薬王は一切のやまひをとどむるがごとく、菩提心も一切の煩悩の病をとどむ。たとへば、馬牛羊の乳の中へ獅子の血を入るれば、馬牛羊の乳はきえうせぬ。[3] また、一切の宝の中に如意珠すぐれたり。一切の功徳の中に菩提心の功徳すぐれたり、[4] とのべ給へり。また、秘密蔵経には、はじめの菩提心より重重の十悪をのぞく。いはんや、第二第三第四においてをや。されば、善財童子の菩提心をおこし給ひしをば、弥勒大士[5]は獅子の座よりおりさせ給ひて、光明をはなちてをがみ給へるなり。これ童子のたつときにあらず、菩提心のたつときなり。

7　十二門開示　一　道心　2　道心おこし難し

しかりといへども、富めるものは、[6] たのしみにふけりて、出家の心ざしなし。たれも善にはものうく、悪にはすすみやすきものなり。

しかれども、釈迦如来は摩伽陀国の御あるじ、浄飯大王の皇子にておはしませば、十善の位にそなはり給ひて、栄花にほこり、大臣百官に囲繞せられ給ふべきに、生死無常のはかなき事をなげき給ひて、王位をすて給ふのみならず、親にも妻にも別れ給ひて、[7] 十二年の間、難行苦行の功つもりて、十二月八日の暁、明星を見給ひて、諸法実相のことはりをさとり給ひてよりのち、三界の衆生の導師となり給へるなり。されば、大国のあるじとなり給ひたらんは、夢まぼろしの間のたのしみなるべし。三世了脱の

仏となり給ひて、ながく生死のくるしみをはなれ、快楽不退の地に座し給ふこそありがたけれ。

ここをもつて、濁世の我等を思ふに、何に心をとどむべき。はやくものうき世路のいとなみをふりすてて、後生善処のいとなみをなし給ふべきなり。人の命のあだなる事はあしたの露のごとく、よひのいなづまにたり。おくれさきだつまこそあれ、つひにはたれか残りとどまるべき。

されば、女人なれども小野小町[8]は生死のことはりをしりてかくぞよめる、

64あるはなくなきはかずそふ世の中にあはれいづれの日までなげかむ

また、賀茂成助がよめる、

65たれとてもとまりはつべき身ならねどまづはさきだつ人ぞかなしき

藤原親盛がよめる、

66けふまではよそにのみきくはかなさのいつ身の上にならんとすらん

露の命のきえぬまに、あるいは逆修の善をまうけ、あるいは目のまへの功徳をつくるべきなり。一期の夢さめて後の追善の物をば、七分が一つをうくるとぞ申しぬる。仏をしへてのたまはく、たとへば王宮に池あり。この池に色香たへなる蓮さけり。ある人、この蓮をぬすまんと思ふ。もし人とがめば、鵞のなくまねをよくすれば、鵞ぞと心えてとがめじ、と思ひてぬすむほどに、花ばかりに心入れて人のくるをしらずして、とらへられて後に鵞のなくまねをしければ、かひもなくていましめられけり。そのやうに露の身のきえてのち功徳をなすは、とらへられて後、鵞の鳴くまねをしたるがごとし。

（五九）

7　十二門開示　一　道心　3　出家・遁世した人

されば、かしこき人は十善の位をだにもふりすてて、冥途をおそれ給ふためし、これおほし。天竺の国王出家し給ひて後、おほきにたのしみ給ふを、大臣あやしみてとひたてまつりければ、十善の位をたもちし時は、一切についてそのおそれありき。出家して後に、おそるる事もなくたのしきよしをぞのたまひける。されば、かやうの人のおほき事は、かぞへつくすにおよばず。仏も、我少[9]出家得阿耨多羅、とぞおほせられける。この心は、われ歳のわかかりし時、出家して仏になる事をえたり、とのたまへるなり。されば、わかくて出家めでたかるべきなり。むかし、七度還俗したりしものの、罪業重きがゆゑに大地獄におちし時、罪人がいはく、我すでに七度還俗したる罪によりて地獄におつ。さて七たび出家したりし功徳はいかに、といひければ、閻魔王たなごころをあはせて礼し給ひて、悪道をまぬがれけり。いはんや道心をおこして出家したる功徳、これにておもひやり給ふべきなり。はやく道心をおこして、とく仏になり[10]給ふべきなり。

7　十二門開示　二　三宝

第二に、ふかく三宝を信じて仏になるべしと申すは、諸仏はみな三宝を信じて、道をえ給へるゆゑなり。三宝と申すは、仏法僧の三つなり。仏にたのみをかけたてまつりて、成仏すべきむねを、おろおろ申すべし。

7　十二門開示　二　三宝　1　帰依仏

法華経には、

今此三界　皆是我有　其中衆生　悉是吾子

とのべ給ふなり。この文の心は、三界の衆生はみなわが子なりとき給へば、父のごとくにおもひたてまつりて、一切衆生[11]たのみ[12]かけたてまつらば、うたがひなく仏になりたまふべきなり。また譬喩経をとき給ひし時は、七日の間青蓮慈悲の御まなこより、くれなゐの涙をながし給ひて、末代の衆生の道心なき事をぞかなしみ給ひし。今生の親は、ただ一世のちぎりばかりなり。親は子を思ひ、子は親を思ふといへども、ただ夢まぼろしの間の事なり。さらに、後の世に二たびみゆる[13]事なし。されば、大聖世尊に父のごとくに[14]たのみをかけたてまつらば、かならず[15]のちの世をすくひ給ふ親をもつべきものなり。僧祇の苦行も、五百の大願も、我等衆生のためなり。しかるに今、見仏聞法の結縁をするも、たれがちからぞや。ひとへに大恩教主釈迦如来の御悲願なり。この御をしへにあづからずは、冥より冥に入るといひて、くらきよりくらき道にまどひて、六道に沈淪すべし。この心を和泉式部がよめる、

67くらきよりくらき道にや入りなましはるかに[16]てらせ山のはの月[17]

はやく随喜して、往生極楽をいのりて仏になり給ふべし。薬師如来は一切衆生の病をとどめて、八菩薩をして極楽へおくらんとちかひ給ふなり。我等貪嗔痴の三毒の病おもきがゆゑに、出離の心なし。いま如来の御悲願にあひたてまつりて、すみやかに生死の大海をわたり給ふべきなり。人、死苦のきはまる時は、かならず断末魔のくるしみ、身をせむるがゆゑに、臨終正念ならず。されば、薬師如来をたのみ

（六一）

たてまつれば、貪嗔痴の業病及び、もろもろの病をのぞき、乃至八菩薩を請ず、とのたまへば、[18]また大慈大悲観世音菩薩は、身を三十三に変じて十方の衆生をみちびき、かたちを六種にわけたまひて、六道の群類をすくひ給ふ。観音御悲願にあづからずは、いかでまつたく蓮台に生まるる事をえん。現世の利生も人みなしれり。されば、中中申すにおよばず。[19]

また、地蔵菩薩はわれら衆生ふかくたのみたてまつるべき仏なり。そのゆゑは、釈迦如来、忉利天にましまして、十方の諸仏菩薩あつまり給ひし中に、地蔵菩薩につげてのたまはく、未来悪世の衆生をば汝に付属す。一日一夜なりとも悪道へおとし給ふ事なかれ、とおほせられしなり。されば、冥途の事におきては、よろづ地蔵菩薩にいのりたてまつりて、今世後世の引導[20]の利生をあふぎたまふべきなり。[21]あるいは閻魔王となりて、中有の罪人をやどし、あるいは十王となりて、七日ごとの罪人をすくひ給ふ。自業自得果の罪まぬかれがたければ、[22]かならず衆生にかはりて苦患をうけ給ふ。しかのみならず、毎日晨朝[23]ごとに、もろもろの地獄に入り給ひて、罪人をとぶらひ給ひぬ。造作五逆罪、常念地蔵尊、遊戯諸地獄、決定代受苦。この経文の心は、五逆罪をつくりたるものなりとも、つねに地蔵菩薩を念ぜば、もろもろの地獄に入りて、衆生にかはりて苦をうけん事決定なり、とのたまふなり。[24]されば、現世の御利益も、いとかなしくぞおぼゆる。

西坂本に、観音院といふところに老いたる女ありき。[25]五寸ばかりなる地蔵をもとめて、麻小笥（おごけ）といふ物に入れたてまつりて、くふ物の生飯（さば）をまゐらせて、年をへてけり。[26]この女、田を二反もちたりけるを、年ごろ子なりけるおとこにあつらへてつくらせけるに、いかなる事かありけん。六月までつくらざりければ、子をうらみて、年ごろもちまゐらせたる地蔵にむかひて、あはれ人にてお

はしまさんには、この田はつくりてたびてまし、とてねたりける夜の夢に、汝が田のつくられざる事をかなしむ間、我つくりてあたへん、とのたまひて、わかやかなる僧の来たり給へるとみて[27]、夜の明けがたにめさめければ、道をとほるものの声にて、きのふまでつくられざりし田を、夜のまには何もののつくりたるらん、といふをききて、夢におもひあはせて、わが田のもとに行きて見れば、この田みなうゑられたり。ふしぎにおもひて、もし地蔵の御はからひにてもやあるらんと、いそぎかへりて見れば、御足手に土うちつきておはしましける。

また、二条朱雀辺に紙漉のありけるが、そのあたりのものども、冷泉河辺[28]のゑぞ寺[29]の地蔵講をぞおこなひけるに、紙漉さして心ざしはなかりけれども、なぐさみがてらにまじはりて、一年に三度づつ、この講をつとめけり[30]。ある年この紙漉やまひ大事にて命終はり、鬼どもにとらへられて閻魔王宮に行きぬ。すでに罪の軽重をたださるる所に、わかやかなる僧一人来たり給ひて、あなかしこにこひうけて、娑婆へかへるべき道を、ねんごろにをしへられけり。あまりにうれしくて、いかなる人にておはしましけるぞ、ととひければ、冷泉河原[31]の辺にあり。一年に一度われを供養し給ひしなり、とてうせ給ひぬ。紙漉よみがへりて、涙をながしてこの事をかたりて、いよいよこの地蔵を帰依したてまつりけり[32]。

また東山にありけるをんなも、年久しく地蔵を念じたてまつりしゆゑに、死したる親をもちわづらひけるを、行脚の僧に現じ給ひて、かの死人を山へおくり孝養し給ひけり。山おくりの地蔵とて六波羅にましますなり。いはんや、かくれての利生、後の世の御たすけおもひやり給ひて、いづれの人もみな地蔵菩薩をたのみたてまつるべきなり[33]。

されば、三井寺の内供智興は、炎天に重病をうけて悩乱する事、前後をしらず。しかるに、陰陽士清

（六三）

明をよびていのらせけれどもしるしなし。清明がいはく、智興は定業かぎりのある人なれば、いかにいのりたてまつるともしるしあるべからず。ただし御弟子の中に師匠の重恩をしり給ひて、かの御命にかはり給ふべき人あらば、まつりかへん、といふ。智興は病のしのびがたきに、心なき事なれば、わが命にかはれとはいはざれども、弟子どもの中を見まゐらせけれども、我かはらんといふものなし。ここに性空阿闍梨といふ弟子、師弟は他生の契あさからず。されば、弘法大師は、師は三世のちぎり、おやは一世のむつび、とおほせられしなり。清明がいふごとく、師匠の命にかはりて、我かの病をうけ、つひに冥途におもむくべし。いそぎまつりかへよ、といふを聞きて、智興、涙をながしていはく、わが命にかはるべき心ざしはうれしけれども、弟子をころしてさきだてん事は、順儀にはづれぬべし。順儀ただまつりかふべからず、といひければ、性空いひつることばなれば、ふつとおもひきりたりけるを、母のありけるが、聞きて、八十にあまりたる母をふりすててさきだたん事、いかに、と制しければ、性空がいはく、流転三界中、恩愛不能断、奇恩入無為、真実報恩者、といふ要文をひけり。この心は三界のうちに流転すれば、恩愛たゆる事なし。恩をすてて無為に入るもの、真実の恩を報ずるものなり、と仏のとき給へるなり。されば、おやの恩は三界をはなれざる恩愛なり。師匠の恩は三界をはなれて無為に入る真実の恩なり。我すでに師匠の命にかはりなば、この功力によりて母もかならず無為の都に入り給ふべし。心やすくおもひたまふべし、といひて、たちまちに師匠の命にかはり、かの業病をうけ、五体やすからず悩乱す。性空やまひあまりにしのびがたければ、本尊の絵像の不動にむかひたてまつりて、我、師匠の命にかはりてこの業病をうけたり。ねがはくは明王、臨終正念にして、はやくころし給へ、といひて、礼拝しければ、絵像の不動の御まなこよりくれなゐの涙をながし給ひて、汝は師匠の命にかはる、

我は汝が身にかはる、とおほせられければ、性空がやまひ、たちまちになほりて、師匠も弟子も命たすかりけり。されば、十方三世の諸仏は同体分身にて渡らせ[38]給へば、いづれの御悲願もみなかくのごとし。されば、いづれの仏にてもましませ、たのみたてまつりて仏になり給ふべし。

7　十二門開示　二　三宝　2　帰依法

また、もろもろの経論・真言の功徳をかたはしづつ申すべし。昔、倶縛婆羅門といふ人あり。一日に千のいき物を殺す。年つもりぬれば、殺す所の物かずをしらず。今生の縁つきて、大地獄に堕ちて、苦患をうくるに、随求陀羅尼のひとつの文字、風に吹かれて屍にかかりける功徳によりて、地獄の鼎[39]、俄にやぶれて、たちまちに清涼の池となれり。いはんや、心をつくして陀羅尼をよみかきたらん功徳は、一切経を百万返よみたるに同じといへり。

また、尊勝陀羅尼の功徳、後の世の事は申すにおよばず、現世にもめでたき事なり。九条の右大臣[40]師輔は、百鬼夜行にあひ[41]給ひたりけるに、尊勝陀羅尼を満て[42]給ひて鬼の難をまぬがれにき。

また、西三條の大将常行は、神泉苑にてかやうの事ありけるにも、この陀羅尼をきぬの襟に縫ひくぐみてもち給ひしゆゑに、助かり給ひにき。されば、冥途の道にても阿防羅刹いかでかこの功徳をむなしくなさんや。よくよく信ずべきものなり。

（六五）

7　十二門開示　二　三宝　3　帰依僧

また、ふかく僧を供養すべし、と申すは、仏、羅漢なくば、持戒の比丘、それなくば破戒の比丘、もしは、[43]かしらを剃り、衣をきたらん法師を供養すべし。持戒・破戒をきらふべからず。

大国に玉をふくむ鳥あり。鳥は宝ともしらざれども、玉は宝なり。されば、僧は破戒なれども供養の功徳は宝となるなり。ここをもつて羅什三蔵は、恥は満衣のごとし。法は蓮花のごとし、との給へり。恥は衣のごとく身にあまりぬれども、法は蓮花の土によごれざるがごとし。

また、弘法大師は、功徳は大地のごとし、おのれがために諸人にほどこせ、とのたまへり。かりそめにも、出家の体をえたらむものをあしくいふべからず。維那といつしもの、おろかにして僧をあなづりしかば、九十一劫、虫にむまれて苦を受く。

またある人、わかかりし時たはぶれに老僧をわろくいひしかば、五百生、犬にむまれき。[44]されば、いかにもあれ、法師を供養して、往生極楽をいのり給ふべきなり。

7　十二門開示　三　持戒

第三に、戒をたもちて仏になるべし、と申す事は、如来の禁戒に入りぬれば、八万四千の悪業、煩悩のいくさの勢は、せめ来たるといへども、まつたくをかさるる事なし。梵網経には、戒をたもつ人は浄土人天のむくひを受く、ととき、成実論には、戒をたもてるものは、もろもろの善根を成就す、[45]と教へ

たり。知度論には、もし人大善根をもとめんとおもはば、まさに戒をたもつべし、といふ。また、十分律に、戒をたもつ人をば、二十五の善神囲繞す、といへり。このゆへに、よくたもつを十善といひ、あしくやぶるを十悪と申すなり。

戒のさまひろし。菩薩戒より沙弥戒にいたるまで、八万の律義、三千の威義などとて、さまざまおほけれども、仏、妙海大王のためには、十戒ををしへ、提謂長者がためには、五戒をさづけ給ふ。このゆゑに、まづ五戒のありさまを申すべし。五戒とは、殺生・偸盗・邪淫・妄語・飲酒[46]、この五を申すなり。

7　十二門開示　三　持戒　1　不殺生

一には、不殺生と申すは、物の命をたたぬ事なり。殺の因・殺の縁・殺の報[47]・殺の業といふは、みづから殺すのみにあらず。人の殺すにもともなはず、人にをしへても殺させず。されば、持戒の比丘、さとにいでて乞食するに、ある玉つくりのもとへ行きぬ。かの玉つくり、家のうちに入りたるひまに鵜といふ鳥来たつて玉をのみぬ。玉つくり来たりて、ここにある玉うせたり、乞食の沙門のぬすめるぞ、とてとらへてうちせめけれども、殺生戒をやぶらじとて、鳥ののみたるとはいはず。うちせめらるるに、このかなづちぬけて、そばなる鳥にあたりて、すなはち死にけり。しばらくありて、沙門のいはく、この鳥は生き返るまじきか、ととへば、はや死にはてたり、といひける時、さらば、この鳥のはらをあけて見よ、玉あるべし、といふ。その時、玉つくり、鳥のはらをあけてみれば、玉ありけり。玉つくり、この僧にむかひて、なにとてやがてこの鳥のみたるよしをばのたまはで、ゆゑなくせめられ給ふぞ、と

いひければ、僧のいはく、われ殺生戒をたもつゆゑにいはざるなり、といひければ、その時、この玉つくり、僧を礼拝して、たつとみけり。

この事を、天台にときたまへり。昔、国王のましましけるが、行業たつとき羅漢を、帰依せんがためにむかへ給ふ。折ふし、碁をうちてまち給ふところに、羅漢の来たり給へるよしを奏しける時、うつ碁にきるべきところのありけるを、興に入りて、ただ切れとのたまひけるを、羅漢の事と心得て、官人、すなはち羅漢の首を切りて、国王、碁をうちはて給ひて後、羅漢こなたへよびたてまつれ、とおほせられける時、はやく切れとのたまひつる程に、切りぬ、と申す。国王、この事を悲しみ、あさましくおそろしくおぼして、仏のもとへまゐりて、懺悔し給へば、仏のたまはく、昔、国王は蛙にて田の中にましましける時、羅漢、農夫にて田を作るほどに、鋤といふものをもちて、心ならず蛙の首を打ち切りけり。農夫くひかなしめども、かひなくしてやみぬ。されば、いまその業をつくさんがために、心ならず殺さるるなり、とのたまへり。

あやまちさへかくのごとし。いはんや心をおこして殺さんむくひにおいてをや。無始生死より、諸仏の利益にもれて、六趣に輪廻してかなしむは、物の命を殺して殺生戒をたもたざりしゆゑなり、とて、仏はとき給へる。かへすがへす物の命を殺すべからず。

7　十二門開示　三　持戒　2　不偸盗

二に、不偸盗と申すは、草の一すちも、針の一本もぬしに知らせでとるべからず。いはんや、その外

のものをや。昔、憍梵波提手すさみに、道のほとりにおちたるあるを、とりたりしゆゑに、五百生の間、飢ゑの姿と成りにき。されば、仏の物を盗みたる者は、生生世世に、手なきものにむまるるなり。くろがねは針にてはて、人は盗みてはつるなり。今生後生あさましき事なり。されば、かしこき人は、人のあたふる物をさへ、ことによりてとらず。ことにぬしのをしむ物はゆめゆめとるべからず。

また、六賊のぬすみといふことあり。一には、よろづの物をみてほしと思ふ。二には、こゑを聞く物、人のかたりつたへたる物をほしと思ふ。三には、ものの香をかぎてほしと思ふ。四には、舌にもののあぢはひを知りてほしと思ふ。五には、身にふるる物に愛着をなしてほしと思ふ。六には、心に物をあんじて思ひ出してほしと思ふ。これみな輪廻の業なり。よくよくつつしみて、生死をはなれ給ふべきなり。

7　十二門開示　三　持戒　3　不邪淫

三には、不邪淫と申すは、妻あるものを夫にせず、夫ある物を妻にすべからず、といましめられたり。されども、これは一人をばゆるされたりければ、事もおろそかなり。不淫とて女のかたへ目をも見やらざれ、と仏は制せられたり。女人は煩悩のみなもとなり。一たび犯しつれば、五百生の間かれにしたがひて、六趣に輪廻す。毒蛇を見るとも女人を見るべからず、といへり。されば、一見於女人、永結三途業、何況於一犯、定堕無間獄、ととき給へり。この心は、一たび女人を見れば、永く三途の業を結び、いはんや一たび犯しぬれば、無間に堕つる事決定なり、とのべたまへるなり。

昔、一人の羅漢、木の枝に烏のゐたるをみて、うちわらひてとほりければ、弟子あやしみてゆゑをと

（六九）

ふ。羅漢のいはく、五百世のあなたに優婆塞にてありし時、淫を犯して一人の子まうけて、六になる時、修行のため出でんとしければ、我をばいかになれとおもひて行き給ふぞ、といひて、足にとりつきて、をめきさけびしかば、そのたびはとどまりき。そのゆゑに、出離の方便なくして、五百世の間、六趣に輪廻して、このたびこそ、やうやう羅漢の果をえたれ。むかしの六子、すなはちこの烏なり、とぞのたまひける。されば、淫欲は第一の仏道のさまたげなり。涅槃経に、

女人地獄使　能断仏種子　外面似菩薩　内心如夜叉

とのべ給へり。この心は、女人は地獄の使にて、よく仏の種を断つ。形は菩薩に似たりといへども、心の内は鬼のごとし。[48]

さるにや、阿育大王の后は、継子の鳩那羅太子をおもひかけ給ひたりけるを、きき給はざりければ、両のまなこをくじり給ひけり。しかのみならず、年ごろの夫を、ままおとこに殺さする女、漢家本朝に数をしらず。また、畜生に嫁ぐ物もあり。これみな淫欲のいたすところなり。よくよくつつしみ給ふべし。しかれども、在家のものには、一人をばゆるし給へり。懐妊のあひだ、月水の時をいましめられたり。男女の契りよしとても、なにの益かあるべき。すみやかに淫欲をはなれて、無上菩提の心をおこして、仏道をねがひ給ふべきなり。

7　十二門開示　三　持戒　4　不飲酒

四に、不飲酒と申すは、酒をのむまじき事なり。天竺に長者あり。一つの蔵の中に酒をつくれり。壺

おほきにして、澄める事泉のごとし。長者の妻蔵にいりて、酒のかめをみるに、若き女のかたちよきあり。いそぎかへりて、長者にむかひて、汝をたのみて偕老同穴の契り深し。うらみなかりつるに、かめの中に女をおきて、我に見せつるは、とうらみければ、長者不思議におもひて、いそぎ行きて見れば、おとなしやかなる男ありければ、長者かへりて女にいはく、我をすかしやりて、間男に殺させんする[49]にこそ、とて年ごろのめをうらみて離別しければ、一人の羅漢、この事をさとりて、酒のかめを見れば、男も女もなし。されば、明けくれ酒をのみのむ程に、酔ひのあまりに本性を失い、我がかげの酒にうつりたるとはしらずして、かやうにほれたるうらみ事をいひけるあひだ、羅漢この酒がめを取り出だしてうちわりて、長者夫婦に見せられける時、二人がうらみ事やみける。

また、迦葉仏の時、一人の優婆塞、酒に酔ひて本心を失ふゆゑに、人のめををかし、結句庭鳥を盗み殺しつ。ぬしはらたちてかこちければ、さなきよしを論じけり。

かやうに酒は本性をうしなはする物なり。されば、酒は五戒をやぶるがゆゑに、仏、譬喩経に[50]とき給へり。

仏説身口意　三業之悪行　唯酒為根本　不飲閉悪道

この心は、身と口と心とを、三業といへり。この業よりおこる罪[51]とかは、ただ酒をもつて根本とするがゆゑに、のまずして悪道をとぢよ、ととき給へる。また、梵網経に酒をとりて人にあたへんものは、五百世の間、手なきものにむまるる、とのたまへり。いはんや、みづからのまんにおいてをや。よくよくつつしみ、仏になり給ふべし。

（七一）

7　十二門開示　三　持戒　5　不妄語

五には、不妄語と申して、そらごとをすべからざるなり。口のとがは身をはみ、舌のとがはつるぎとなつて、命をきるといふは、そら事をいましめたるなり。されば、地獄にして罪人にむかひて獄卒のいはく、妄語の火は大海もやきつべし。いはんや、妄語の人をやかん事は、草深き枯野に火をつけたらんがごとし。地獄のたきぎは妄語なり。

されば、妄語の罪におちたるもの、とほきよの事は数をしらず。ちかく証拠をあらはせるは、紫式部、そらことをもつて源氏物語をつくりしゆゑに、地獄におちて苦患をうく。はやく源氏をやきすてて一日経をかきとぶらふべし、と人の夢に見えけるとて、歌よみどもの集まりてとぶらひしなり。たとひ狩人の鹿をもとめうしなひて、ここを鹿やとほりつるといはんに、かれを殺さじがために、しりながらしらずといはんをば、妄語なれども、仏もゆるし給ひぬべし。およそこれにあひたらん事はくるしからず。この外の妄語は芥子ほどの妄語の事なりとも、須弥山程の苦を得べしなり。[52]

されば、恵心僧都は年の始めにかならず御門の行幸を見給ひけるを、御妹の安養の尼と申す人のあやしみて、きみは無極の道心ある人なり。何ゆゑに年ごとにおほやけの行幸をば見給ふぞ、とのたまひければ、むかしの十界のちからにて、いま十善の位にむまれ給ひたる事のなつかしければ、見たてまつるなり。されば、大臣公卿よりはじめて、いやしきからかさもちにいたるまで、前世の戒力によりて上下のありさまをみて、過去遠遠の流転を観ずるなり、とぞのたまひける。

今世後世めでたき事は、ただ五戒をたもつに過ぎたる事なし。たとへば、もろもろの悪念煩悩は行者

のためにかたはなり。かのかたきをうたんとおもはば、善心の勢をそろへて一足もしりぞく事なかれ。その時は悪念の猛勢を射おとされて、にげかくれぬ。しかりといへども、ややもすればすきをみて煩悩のやから謀叛をおこす。おこすといへども、善心のはかり事かしこければ、つひに妄念のかたきほろびうせて、無為の都のあるじとなりて、ながくたのしみにほこりて、二たび生死をうくる事なし。いかにも如来の禁戒をたもちて、後の世をねがふべし。一生は一まじろぎの程なり。かへすがへす、いるかせに思ふべからず。かやうの事をふかくしんずるを智者とは申すなり。

7　十二門開示　四　行業

第四に、もろもろの行業[53]を積みて仏になるべしと申すは、諸仏はみな六波羅蜜を行じて、正覚なり給へり。六波羅蜜と申すは、一には檀波羅蜜、布施の事なり。二には尸羅波羅蜜、戒をたもつ事なり。三には闍提波羅蜜、ものをこらへてあだかたきのとがをも思ひなほして、人のいたむべき事をわが身におもひしるべきなり。四には毘梨耶波羅蜜、精進をかたくするなり。五には禅波羅蜜、心をしづかにもちて仏道をもとむべき事なり。六には般若波羅蜜、ちゑをもつてまよひの衆生をすすめて極楽へみちびくべし。この六をあはせて六度万行と申すなり。

されば、尚闍梨仙人はもとどりに鳥のすをくひて子をうむに、かひこのすだつまではたらかず。悉多太子は檀特山に入り、迦葉尊者は鶏足山にこもりてぞおこなひ給ひける。[54]しかのみならず、大峯・葛木をとほり、堂をたて、仏をつくり、経をよみ、花をつみ、水をむすぶ人、みな仏道なるべきおこないな

（七三）

り。鹿母夫人[55]はあゆむ足の下ごとに蓮花のひらけるなり。むかし、仏に花をたてまつりしゆゑなり。

むかし、堂のくづれたりし所に土をぬりて、つくろひたりし人、九十一劫悪道をまぬがれて迦毘羅[56]長者の子にむまれき。仏のはげたりしに、箔をおしたりしゆゑに、未来にかならず仏になりて光明如来といはるべしとぞ、仏さづけ給へる。[57][58]

天竺・震旦・吾朝に、心ある人のたれか仏道を修行せざる事のある。阿育[59]大王は八万四千の塔をたて、梁の武帝は二千九百の堂をたて、行基菩薩は四十九院をたて給へり。いづれのかたにてもあれ、心のひかんかたをつとめおこなひて、仏になり給ふべきなり。

7　十二門開示　五　発願

第五に、浄土に往生せんといふ願をおこして、仏になるべしと申すは、もろもろの仏菩薩は衆生をあはれみ給ひておのおの願をたて給ふ。その心おほくの経に見えたり。釈迦如来は五百の願、薬師如来は十二の願、阿弥陀は四十八願、普賢菩薩は十願。おのおのこれら[60]衆生をあはれみて、すくはんと思し召して、ちかひたまふ御心ざしなり。

されば、心あらん人は願をおこし、[61]仏道を成就して、有縁の衆生をみちびき、無縁の罪人をとぶらふべきなり。大荘厳論には、行業は牛の車のごとし、願は牛かひのごとし。行の牛の車あれども、願の牛かひなければ庭をめぐる事なし。はやく行業をつみて、往生の願をおこして浄土にまうで、[62]一切衆生をみちびき給ふべきなり。

ここをもつて普賢菩薩は、

願我臨欲命終時　尽除一切諸障碍　面見被仏阿弥陀　即得往生安楽国

といへり。この心は、願はくは、われ臨終の時に臨まば、ことごとく一切の障碍を除いて阿弥陀如来を見たてまつりて、すなはち安楽国へ往生する事をえさせしめ[63]給へ、となり。

また文殊は、

願我命終時　尽除障碍　面見阿弥陀　往生安楽国

と。これもまへにおなじ心なり。

また、いはく、

誓願不思議　西方無量寿　極重罪衆生　往生安楽国

といへり。この心は、阿弥陀の誓願ほど不思議なるはなし。極重の衆生なれども、極楽へ往生す、といへるなり。

されば、極重の悪人さへ弥陀の誓願にはもれず。いはんや心あらむ人においてをや。

また、天竺の波斯匿王のむすめ勝鬘夫人はかたちみにくく、髪ちぢみ、色くろくして人に見ゆべきかたち[64]にあらず。しかれども、恩愛すてがたくて、ひとつの楼にかくしおき給へり[65]。さるほどに、仏をむかへたてまつりて、説法をさせまゐらすべきよし、おほせられければ、波斯匿王の都のものども、みなみな聴聞すべきことをいとなみしに[67]、時にかの勝鬘夫人は、人のまへには出づまじき人にてましませば、この事をかなしみて、仏の法をきかむ、といふ願をおこし給ひたりければ、仏、かの楼のうちへ光をはなち給へり。この光にあたりて、勝鬘夫人のかたち檀金[68]になり、ちぢめる髪もたちまちに翡翠のごとく

（七五）

に見えければ、大王よろこびて、そののち、[69]いよいよ説法を聴聞せられけり。これも願力のゆゑにより て、勝鬘夫人のかたち檀金になり給ひき。

せんしやく比丘[70]はあまりにものはぢをしてむまるるたびごとに、はだかにてむまれじ、といふ願をたてければ、うたがひなく物をきて生まれき。

されば、少納言公経[71]は、受領して河内の国へ下りけるに、一宇の堂を建立せん、と思ひて見ありきければ、ふるき堂あり。仏壇のうちを見れば、よくしたためたる文あり。取りてひらきて見れば、その状にいはく、沙門公経うやまつて申す。一堂興隆の願ありといへども、力なくして供養をとげず。ねがはくは、来世に当国の国司にむまれて、この供養をとげしめ給へ、と書きたり。この沙門の名のりの文字を見れば、わがなのりの文字とおなじ文字なり。その時、むかしの事をさとりて、供養をとげたり。これも願力のゆゑなり。

またむかし、微妙の尼といふものあり。宿命通を得て、むかしの事をかたりていはく、われ、むかし一人のまま子をにくみて、ひそかにかしらに針をさしつ。母あやしみて我をうたがひしかば、おほくのちかごと[72]をたてたりき。そのちか事[73]ひとつもたがふ事なく、生生世世に負ひたりしなり。今、羅漢の果を得たりといへども、かしらより足のうらまで針を通すやうなる苦患あり、とぞかたりける。何事も一念おこす所の願は、生生世世にはたすなり。

されば、往生極楽をねがはむに、阿弥陀如来、紫雲にのり、西方より来迎し給はんこと、うたがひあるべからず。遠きたとへは申すに及ばず。近くは東大寺の得業といつし人、大般若、供養すべき願をはたさずして、にはかに命をはりけるが、閻魔王宮よりかへされて、供養をとげて、ほどなく往生せられ

けり。その時、閻魔王のさづけ給ひし経文あり。

般若第一教　此経結縁者　雖有重業障　必当得解脱

この心は、般若は第一のをしへなり。[74]この経文を結縁するものは、業障おもしといへども、かならず解脱を得る、といへり。[75]そのころ閻魔王、誦せられたる経文なりとて、あまねく諸人、申しあへり。

7　十二門開示　六　懺悔

第六に、業障を懺悔して仏になるべし、と申すは、人界に生をうくるたのしみは、[76]懺悔の法にあひしゆゑなり。道綽禅師の安楽集に経文を引きてのたまはく、人の一日一夜をふるあひだには、八億四千の[78]思ひあり。いはんや念念におこすところ、思ひの数、無量無辺なり。これみな三途の業となる、[79]といへり。いはんや一生涯の業をや。いはんや生生世世の業をや。[80]この心をば、永観禅師が七段の式にくはしくしるせり。心地観経には、在家のものは、欲煩悩の因をまねく。[81]しかりといへども懺悔すれば、あらぶる煩悩みな滅して菩提の花ひらく、懺悔すれば、大円鏡をみる。懺悔すれば宝所にいたる。[82]百丈の石なれども、舟筏につみぬれば、大海にしづむ事なし。罪は百丈の石のごとし。懺悔は舟筏のごとし。はやくもろもろの業障を懺悔して、生死の苦海を渡るべきなり。[83]

されば、普賢菩薩は、有相・無相・刹利居士、この三の懺悔ををしへたまへり。よくよく心得しるべし。

（七七）

7　十二門開示　六　懺悔　1　事理の懺悔

まづ色相の懺悔といふは、無始生死よりつくりし罪をはぢくやみて、発露涕泣して、あるいは本尊にむかひ、あるは賢聖にむかひて、懺悔するなり。大経にいはく、もし人罪をつくりて、かくせば、すこしき罪なりとも、[84]いよいよ増長す、といへり。しかれども、ことばを懺悔して心を懺悔せざるは、いたづら事なり。心の罪は懺悔すれども懺悔せられず。一心に懺悔して、業障をほろぼし給ふべし。これをまことの懺悔といふなり。次に無相の懺悔といふは、一切の業障はみな妄相なり。生ずれども有の体といふものなし。これを利の懺悔と申すなり。

たとへば、千年のやみはくらけれども、懺悔の一寸の紙燭をいれぬれば、千年のやみはれぬべし。たとへば業障のたきぎは千里につみたりといふとも、けしばかりの懺悔の火をつけぬれば、ことごとくやけうせぬ。たとへば、悪業の雲霧はあつけれども、懺悔の風吹けば、悪業の雲霧みなはれて、法性の空あきらかなり。たとへば、煩悩の露霜はふかけれども、懺悔の恵日出でぬれば、すなはちきえうせぬ。この心を、普賢経にとき給へり。

一切業障海　皆従妄想生　若欲懺悔者　端坐思実相
衆罪如霜露　恵日能消除　是故応至心　懺悔六精根

この心を歌によめる、[85]覚樹法師、

68命をも罪をも露にたとへけりきえばともにやきえんとすらん

前斎宮大輔、

69心よりむすびおきける霜なれば思ひとぐ日に残らざりけり

懺悔と申すは、生生世世につくる罪をはぢ、悪業煩悩におぢおそるるをいふなり。一つのせうこを申すべし。天竺に商人あり。もろもろのたからをもとめんがために、五百人の友をぐして、風にまかせて舟を出だし、大海を渡る程に、色あをく、かしらの髪あかくして、口よりほのほを出だし、目より光をはなちたるもの、舟のはたをとらへていはく、汝ら我よりおそろしきもの見たりや、といふ。五百人のもの、おのおの心をまどはし、きもをうしなひて、舟のそこへころびふしてありけるに、この中に五戒をたもちける俗人ありけるが、物をいはずはなかなかあしかりなん、と心えて、汝よりおそろしきものあり、といへば、ばけ物のいはく、いかなる物ぞ、きかまほし、といふ。時に、この俗、汝ら百千万[86]あつめたるより[87]、なほおそろしき阿防羅刹の中へ、我をつれてゆかんとする悪業煩悩の心は、汝よりもおそろしきにあらずや、といひければ、このことばを聞きて、かのばけ物、海のそこへいりぬ。すみやかにこの俗のおもひをなして[88]、悪業煩悩におそれて、業障をはぢ給ふべし。

7　十二門開示　六　懺悔　2　刹利居士の懺悔

次に、刹利居士の懺悔と云ふは、正法をもつて国をおさめ、六斎日物の命をころさず、父母に孝養するを申すなり。正法をもつて国をおさめるといふは[89]、まつり事ただしからねば、天下みだる。天下みだれぬれば、万民のなげきなり。民のなげき、すなはち罪業なり。まつり事のあしきは、今世後世のたたりなり。されば、魏の文帝は六斎日に物の命をころしたまはず。

（七九）

（八〇）

むかし、小沙弥の有りけるが、ありのひとつ、水にながれけるをとりいけたりしによりて、今生の命のびたりき。夜叉長者は、干つまりたる池の水にすめる魚をとりて、大海にはなちたるゆゑに[90]、長者の徳をあらはす[91]。されば、八幡大菩薩の御母、神功皇后の異国退治の御時、おほくの殺生をつくらせ給ひしかば[92]、その群類をすくはんために、すくなき水にすめる魚をとりて、大海にはなち給へり。今の放生会のまつりごとこれなり[93]。放生会とはいけるをはなつ会とかけり。たとひ、ちひさきかたちをうけたるものなれども、命ををしむ事は泰山よりおもし。たとひ、畜類にむまるるといへども[94]、子を思ふ事は、人界よりもすぎたり。かへすがへす物の命をころさずして、よくよくあはれみ給ふべし。物の命をたすけぬれば、亀雀にいたるまでもその恩をしりて、かならずかならず後の世にむくふなり。これ程の事は、いかなる賤（しづ）の女なんども[95]しりたる事なれども、しりながらしらぬなり。

されば、仏も重説偈言とて、一たびとき給ひし事なれども、かさねがさねのべ給ひしは、よく衆生の[96]耳にききたもたせんがためなり。こまかに申すにおよばず。また、乳母[97]に孝養して仏になるべし、と申すは、懺悔の中の第一の懺悔なり。父の恩のたかき事は、須弥山のごとし。母の徳のふかき事は、蒼海にたり。白き骨は父の恩なり。赤き肉は母の徳なり。人むまれて母の乳をのむ事、百八十石なり。水中のかめの子をみる眼、霜夜の鶴の子を思ひて鳴くこゑ、いづれも恩愛いとふかし。いはんや人倫においてをや。わが身にかへて子を思ふためし、少少申すべし。

漢の高祖[98]、楚の項羽とたたかふ程に、高祖のかたに石奢といふつはもの有り。項羽、石奢が母を取りこめて、汝が子石奢を、我かたへよばずは、命をたつべし、といひけれども、項羽は天下をたもつまじき相ありとみて、子には、ただ高祖につかへよ。われは命をすつ、といひおきて、つるぎにおちかかり

てうせにけり。

されば、心地観経には、

世人為子造諸罪　堕在三途長受苦

ととき給へり。この心は、よの人は子のためにもろもろのつみをつくりて、三途におちて、ながくくるしみをうくるぞ、とのたまへり。[99]

また、吾朝武蔵の国にむかし火丸[100]といふものあり。おもはしき妻をもちたりけるが[101]、国司の京上しける[102]ともして、のぼるべきにて有りけるに、この妻をすててのぼらん事をかなしみて、禁忌のよしをいひて、のぼらじとて、母を山の中にぐして行きて、ころさんとする時、大地にはかにわれて、かの火丸[103]おち入りけるを、もとどりをとりて引きあぐるは母なり。子の大地へ[104]おち入る事をかなしみて、わがいのちのうせん事をばおそれず。かたきとなれる子をひきあげしは、いとわりなくぞおぼゆる。くはしくは、火丸[105]が伝にみえたり。これほどに、心ざしの浅からぬおやのために、孝養せざらん人あらんや。しかりといへども、天人はたのしみにふけりて、孝養の心ざしなくして、三途のくるしみにせめらるるなり。

されば、仏は御母の孝養のために忉利天にのぼり、報恩経をとき給ひしなり。極楽に往生したる衆生にむかひて、鳧・雁・鴛鴦[106]のいはく、父母孝養の往生か、師長奉仕の往生か、ととふなり。

されば、父母孝養の心ざしをもつて、極楽に往生せん事、これにてもしるべし。これ刹利居士の懺悔の大意なり。仁明天皇は、一年が間の罪を懺悔せんとて、年のはてにかならず三千仏の[107]御名をききてぞ、罪障を懺悔し給ひける。これを仏名となづけて、いまにたえず。むかしいまの人、この心をおほく歌によめる。[108]平兼盛、

（八一）

70あら玉の年もつくればつくりけんつみは残らずきえやしぬらん[109]

源仲綱、

71過ぎにしも後もしらるる身のうさに三世の仏のなつかしきかな

7　十二門開示　七　布施

第七に、もろもろの施を行ずべしと申すは、諸仏はみな施をほどこして正覚となり給へり。これを檀波羅蜜という。竜樹菩薩は施を行ずる人は、月のはじめて出づるがごとし。[110]諸人にうやまはるるとのたまへり。国城妻子をすてん事、草木よりもかろく、頭目手足を施する事、土石[111]よりもやすくすべし。ここをもつて法花経には、

国城妻子　頭目髄脳　身肉手足　不惜身命

ととき給へり。この心は、法のためには国処、女子はいふにおよばず、五体六根および命をもをしまざれ、[112]とをしへ給へり。

されば、尸毘大王は鳩にかはりてみづからの肉を鷹にあたへ、薩埵王子は飢ゑたる虎にわが身をほどこし雪山童子は無常の文に命をかへ、舎利弗尊者はまなこをぬきて乞眼波羅門にとらせしなり。これならず、施に心ざしのある人、少少申すべし。阿闍世王、仏をむかへまいらせて、説法させたてまつりて、[113]夜に入りて仏の御かへりありければ、阿闍世王、宮より祇園精舎まで火をともし給ひけるに、貧女の銭弐文もちたりけるが、これを油にかへてともしたりけるがゆゑに、三十一劫をへて仏になるべし、とて[114]

須弥灯光如来とぞさづけ給ひし。これを長者の万灯より貧女の一燈[115]とは申すなり。後の世は申すにおよばず、今生に徳をあらはす事おほきなり。

天竺に絵師あり。伽毘羅城[116]に請用を得て行きぬ。妻子立ち居に待つ程に、世の中を過ぎわびて、絵師のかへるをたのみて、おほくの人の物をかりてつかひて月日をおくりけるに、絵師十二年といふに、金を三十両えてかへるに、道のほとりに堂のありけるに、仏に箔をおさんとて金をすすむる聖あり。絵師おもひけるは、家にもちてかへりては、ただ今生の宝にてこそ[117]あらんずれ。仏にまゐらせて生生世世の宝になさんと思ひて、この金を仏にまゐらせけり[118]。手をむなしくして家にかへりけるに、妻子よろこびて、何をかもちてかへりきたる、ととへば[119]ありのままにかたりけるを聞きて、これほどたのみまちつるかひもなく、今ははやまどひ者になりぬ、とかなしみなげくを、おほやけに[120]この事をきこしめして、心おほきなるものなり。国のつかさしるべしとて、国のかみになし給へり。今生の利生かくのごとし。後生のうつたへおもひやり給ふべし。

されば、仏の御肌への金色なる事は、湯をわかして人にあびせ[121]給ひしゆゑなり。ここをもつて、光明皇后は湯をわかしてみづから人の垢をすり給ひけるに[122]、おそろしげなるかつたゐの、わが垢すりてたべ、といひければ、願をやぶらじ、とてひそかに垢をすり給ふとて、この事人にないひそ、とのたまひければ、かつたゐまた阿閦仏の垢すりたりと人にないひ給ひそ后、とてかきけすやうにうせけり[123]。

されば、阿閦仏変化し給ひて、かの心ざしの程[124]をこころみ給ひしなり。仏、施[125]の功徳をほめ給ふに、十方の国土をちりとなして、その国の草木瓦礫[126]としり、三千世界の水を大海にいれて、その河の水とはしるとも、施の功徳はたやすくかぞへつくすべからず、とのたまへり。

（八三）

されば、くひ物を人にあたふるは、五の徳をあたふるといへり。一には命、二には色、三には力、四にはやすらかなる事、五にはことばなり。この五の事は物をくはざれば、いづれもかなはず[127]。好賢樹といふ木の実は芥子よりもちひさけれども、一夜に百丈おひのぼりて、そのかげに五百両の車をかくす。施の功徳はかくのごとし[128]。少しき功徳なれども、かならず地獄にておほきなるたすけとなれり。

されば、獄卒、罪人にむかひて、など功徳をばせずして奈落の古郷へはかへりたるぞ、といへば、罪人、貧苦無福にして宝をほしがりしゆゑに[129]、少しの善根をもなさず[130]、といへば、獄卒、いかれるまなこを見ひらきて、はげしきこゑをあげていはく、いたづらに野辺にさきし花一枝、仏に施したてまつらん心ざし、貧しさによるべからず。むなしく谷にながるる水、一むすび僧に供養し施さん事、たからのなきによるべからず、とぞ申しける。はやく一花一水なりとも仏法僧に施して、仏になり給ふべし。

7　十二門開示　八　観念

第八に、観念をおこして仏道をいのると申すは、祖師、先徳みな観によるがゆゑに、みな得道せしなり。たとへば、将軍になりたる人の、翠帳のうちに臥しながら、はかりごとを万里の外にめぐらし、天下ををさむるがごとし。かしこき人は柴のいほりの内にゐながら、十万億のほかなる極楽浄土の依報、荘厳を観じて、往生の本意をとぐるものなり。されば、浄土浄刹は観念のたなごころのうちにありといへり。あるいは、弥陀如来の功徳池の宝蓮台に坐して、はるかに光明をはなち給ふ事を観じ、あるいは七重宝樹の下に観音・勢至の二菩薩、大梵和雅[131]の御声して、説法し給ふ事を観じ、あるいは紫雲にのり

て西方にあらはれ給ふを観じ、あるいは六十万億那由他、恒河沙由旬の大身を観じ、あるいは眉間白毫の五須弥のやうなるを観じ、あるいは宮殿楼閣の飛行するを観じ、あるいは上品蓮台の暁の楽しみの声[132]を観じ、あるいは鳧・雁・鴛鴦の五根五力の法文をさへづるを観じて、八十億劫の罪障をのぞきて、つひに安養浄刹に往生するなり。くはしく[133]観無量寿経にとき給へり。これを十六相観といふ。あるいは[134]我が身のうちの真如実相を観じ、あるいは諸法の空寂なる事を観じ、あるいはこの身の不定なる事を観じて、みな往生極楽の因とするなり。

7　十二門開示　八　観念　1　真如実相観

真如実相を観ずるといふは、心仏及衆生のおもひをなして、是三無差別と観ずるなり。この心は、心と仏と衆生とこの三つは差別なしと観ずるなり。一切衆生悉有仏性、如来常住無有変易、とのべ給へり。この心は、一切の衆生はことごとく仏性あり。如来常住にして変ずる事なし、といへり。このゆゑに、心ある人はみな、一色一香、無非中道、と観じて真如実相一つなりと知るなり。不軽菩薩の、不敢軽慢、とおがみ給ひしも、一切衆生仏性を具したり、と観じ給ひしなり。生あるものはいづれか仏性を具せざるべき。我等がむねの中に、本覚の心法身の妙法の蓮台に坐して、三十七尊かた時もたちさり給ふ事なし。しかりといへども、生死長夜の闇ふかくして、本有常住の月の光[135]をかくし、四智円明の鏡に塵つもりて、三身満徳の影うかぶ事なし。されば、大集経には菩提をはなれ[136]、一法ある事なし、とをしへ給ふなり。我も仏、人も仏なり。観じて真如実相一つ、としり給ふべきなり。

（八五）

（八六）

むかし、僧多羅と申しける法師あり。無智文盲にしてさとるところなし。ただ口には三十七尊住心城、ととなへ、心には真如実相の思ひをなすより外、別の行なし。命終の時、天衆来迎し給ひて、都卒の内院にむまれぬ。この証をみて、不空三蔵、つねに帰命本覚真法身、常住妙法心蓮台、本来具足三身徳、三十七尊住心城、ととなへて、真如実相を観じ給ひけるを、弟子あやしみて、かばかり不浄なる身の中に、三十七尊、妙法の心蓮台にましますらんこそ、うたがはしけれ、といひければ、三蔵、仏の御まへにして、この観念をなし給ふ時、三十七尊胸の間にあらはれて、十方にひかりをはなち給ひき。弟子これをみてうたがひの心をひるがへし、随喜の涙をながしき。

木には春花さきて、秋このみをむすぶ。木をわりて見れば、中には花もなし。このみもなし。しかりといへども、縁のいたりぬれば、花さきこのみ[137]をむすぶ。人の身のうちをみれば、妙法の蓮台もなく、三十七尊も住したまはず。しかりといへども、真如実相を観ずれば、三十七尊あらはれ給ふなり。たとへば、大海の底にある石に火の性ありといへども、無量歳をへても、火の性をあらはす事なし。しかれども、人この石をとりあげて火打ちといふ物をあつれば、火を出ださずといふ事なし。三十七尊、またまたかくのごとし。観念せざる人のためには大海のそこの石のごとし。はやく観念をいたして、心の月輪[138]かたちをあらはしたまふべし。ただし、この観念を[139]なまじひの智者などはかなふべからず。しかりといへども、仏と衆生と一つなり、と観念すべし。[140]

ひとつのたとへを申すべし。人の親とほき所へ[141]ゆきて大事のやまひをうく。二人の子をもちたるに、一人の子はゐたる所ちかし。一人の子はゐたるところとほし。おやのもとよりやまひするよしをつげけるに、ちかき所にゐたる子ははしりいでて、おやのもとへ行きけるに、あまりに雨ふり日もくれて、[142]夜

に入りければ、行きさきも見えずおそろしかりける程に、塚穴のありけるにいりて、夜あけてゆかんと思ひてゐたる所に、今一人の子はゐたる所とほくして後にゆきけるが、これもあまりにくらくて[143]、夜をあかさんと思ひて、かの穴に[145]入りぬるところに[146]、もと入りたる子は、鬼のくらひにきたると思ひて心をまどはす。いま入る子は穴のうちに、鬼ありて、われをくらはんとする、とおもひてきもつぶす。かくて二人の子、本性をうしなひてゐたるほどに、やうやう夜もあけて[147]心をとりしづめて見れば、兄弟なり。衆生もかくのごとし。生死長夜にまどひ[148]、無明の鬼あり、とおもへば[149]、善根の暁になりぬれども[150]、真如実相一つなり、としるなり。悪業煩悩のまなこのまへには、仏と衆生と差別あり、と見れども、真如実相をさとりぬれば、心仏及衆生差別なし、としるなり。

7　十二門開示　八　観念　2　空観

また空観と申すは、色即是空のおもひをなして、諸法をむなしとしる[151]。無大・無小の観をいたして、一切ありとおもはぬなり。されば、ふるき詩にもかくこそつくりけれ。身を観ずれば、岸の額に根をはなれたる草、命を論ずれば、江のほとりにつながざる舟、この心を歌によめる[152]、

72世の中をなににたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白浪

このゆゑに人もむなし、われもむなし。これもむなし、かれもむなし。万法みな空なり、と観ずべし。されば、煩悩の草むらしげき中に、悪業の虎狼ふすといへども、空観の火をつけぬれば、煩悩の草むらやけうせて、悪業の虎狼すむ所なし。この観いたりぬれば、むしやう[153]の罪障はみなきえうせて、つひに

（八七）

菩提のきしにいたれるなり。[154]

むかし、仏の御弟子道を行き給ふに、農夫二人して田をつくりけるが、一人にはかに死にけり。今一人、これをかなしめるけしきなし。ふしぎにおもひ給ひて、この事をとはれければ、農夫、わが子なり、とこたふ。その時、仏弟子、他人のしぬるさへみればあはれをもよほすなるに、いはんや恩愛ふかき子の死ぬるを見て、いかでかなげきかなしまざる、ととはれければ、農夫のいはく、一とせ仏の説法し給ひしに、この身はむなしきものなり、ありとおもふべからず、ととかせ給ひしなり。されば、いまさらおどろくべからず、といひけり。あまりにふしぎにおもひて、かの家に行きて、母にこの事をいひければ、[155]おなじやうにいひて、うちわらひてありければ、その時、仏弟子、かかるいやしき田夫なりといへども、空観を観じける事のありがたさよ、と随喜の涙をながし給ひて、心あらん人は、諸法の空なる事を観じ給ふべし。[156]

外道、仏弟子にあひたてまつりて、仏は諸法を空なり、とのたまへども、むかしあるくるしみは今もあり。むかしあるたのしみはいまはあり。火はあつく、水はさむし。何をもつてか空なりといはん、と申しければ、仏弟子こたへていはく、大焦熱地獄の衆生は、くるしみ忍びがたしといへども、無間地獄の衆生のためには、他化自在天のたのしみを見るがごとし。金輪聖王の果報はたのしけれども、四天王のまなこの前には等活地獄の罪人を見るがごとし。人間の火はあつけれども、地獄の火にくらぶれば、水のごとし。娑婆の水はさむけれども、奈落の水にくらぶれば火のごとし。たのしみもたのしみならず、かなしみもかなしみならず、とぞのたまひける。はやくこの思ひをなして、諸法皆空なりと観じ給ふべきなり。

（八八）

7　十二門開示　八　観念　3　不浄観

また、不浄観と申すは、わが身も[157]人の身も不浄なる事を観ずるなり。たとへば、絵書きたる瓶の中へ、糞穢をいれたるがごとし。業平中将のよろづ貴賤[158]男女[159]におもひをかけられしも、西施が一たびゑめば、千金ををしむ人なかりしも、つひには野のほとり、河の間にすてられしかば、そのすがたみなかはり、白きはだへは青くくさり、赤きくちびるは黒くなりて、[160]ただれやぶれて、虫わきいづるなり。犬は手あしをくらひて西南[161]にはしり、烏はまなこをくじりて東北[162]にとぶ。くさき香を[163]とほくにほひおこせば、[164]あたりにちかづく人もなし。つひに、蓬がもとのちりとなりて、白骨ばかり所所にのこれり。心あらん人、たれかこれに着心をなさんや、と。この観念をなさん時、かならず無始生死の罪障、ことごとく滅するなり。このゆゑに、恵心僧都は、不浄観をなさんと思はば、つねに墓のほとりに行きて、死人のかばねを見よ、とぞのたまひける。観念によりて、罪もかへりて功徳となる事あり。されば、仙預王は仏をもちひぬもの[165]をころし、東光梵士は、おもひかけてあはずは身をなげん、といひし下女ををかしけり。破戒なりといへども、観念によるがゆゑに、浄土の縁となるなり。されば、弘法大師は、智者のつくる罪はおほきなれども、地獄におちず。愚者のつくる罪はちひさけれども、地獄におつ、とおほせられける。これすなはち観念によれるがゆゑなり。煩悩即菩提といひ、因欲即是道、愚痴亦如是、ととけるもこれなり。

昔、達摩大師、天竺にて修行し給ひける時、無智の僧二人ありけるが、碁をうつより外の事なし。見る人これをにくみ、きくものかれをそしる。達摩しづかにこの事をとひ給ふとき、二人の僧こたへてい

（八九）

はく、黒の死する時は、黒煩悩のうすることをよろこび、白の死する時は、白法善根の滅する事をかなしみて、無上菩提を観念するなり、と申しけるにあはせて、命終の時、聖衆来迎の素懐をとげたりき。されば、観念をもつて往生せん事うたがひあるべからず。

仏、忉利天より一夏九十日過ぎて天竺へかへり給ひて、我をばたれかはやく見つる、とおほせありければ、花色比丘尼[166]こそ一番におがみたてまつりつれ、と申しければ、仏のたまひけるは、須菩提が石室に入りて、坐禅して空寂を観ぜしよりほかに、我をとくみたるものなし、とありし時、みな不審にぞ思ひける。仏は、若以色見我、以音声求我、是人行邪道、不能見如来、の心をもつておほせられしなり。

されば、禅法修行こそ、たれもあらまほしき事なれども、心ざし[167]あさくてはかなはぬ事なり。しかれども、心あらん人は、ねぶりをさまして観念をいたして、仏と衆生とへだてなき事をしりたまふべし。仏と衆生とへだてなければ、地獄も極楽もへだてなく、獄卒罪人のへだてもなし。よくよく修行し観念して、大涅槃に入り給ふべし。

7　十二門開示　九　善知識

第九に、善知識にあひて仏になるべし、と申すは、一生涯の間、十悪五逆ををかせる人、命終の時になりぬれば、阿防羅刹、火の車を具してまなこのまへに現ず、といへども、善知識のをしへによりて、もしは十念、もしは一念、弥陀の名号をとなへ、また、くるしみにせめられて口にとなへずといふとも、西方にむかひて、そなたに仏ましまし、と心のうちに思へば、火の車たちまちにうせて、花のうてなの

まへに現ず。このゆゑに、法華経にも、

善知識者　是大因縁

とはとき給へり。阿弥陀如来はなたいゑ国[168]の無静念王[169]と申せし時、法界梵士[170]のすすめによりて、空王仏につかへたてまつり給ひて仏道をきはめ、有縁無縁の衆生をもらさずすくひ給はん、との御誓願ふかくおはしませば、末法万年まで、弥陀の一教をたのみ給ふべきなり。

されば、後の一條院の御とき、宇治殿頼通の延暦寺へ、人の仏道なるべき要文を、諸経の中にてしるしまゐらせよ、とおほせつかはされけるに、

若有重業障　無生浄土因　乗弥陀願力　必生安楽国　極重悪人　無他方便　唯称弥陀　得生極楽

三塔の学匠たちあつまりて、この文をかきぬきてぞたてまつられけり。

まことに、我等、濁世末代に生をうけて、過去遠遠の諸仏にもすてられまゐらせて、無始生死より六道に輪廻して、大苦悩を[171]うくる身を、他の方便かなはざれども、弥陀を称念せば、極楽へむかへん、とちかひ給ふ御慈悲を、いかなる人かたのみたてまつらざるべき。諸仏の御誓願、いづれも勝劣おはしまさねども、とりわき弥陀の願力にすぎ給ふべからず。

されば、阿闍世王は父をころし給ひしかども、耆婆大臣のをしへによりて、霊山の聴衆につらなり給ひて、成仏し給ふ。また、不動国のこんしゆ太子[172]のうき事にあひて出家せしをば、仏は善知識にあへる人なり、とぞおほせられける。

我朝にもかやうのためしおほし。源満仲はあまりに罪ふかくて、仏法の名字をしらぬ事をかなしみて、源顕法眼[173]と申せし子のありしが[174]、延暦寺より、恵心僧都そのほか座主などをかたらひ、多田の家に行き

（九一）

て物がたりどもをさせければ、かの満仲ことわりを聞きて、やがて道心をおこし、法師になりて夏飼ひの鷹三百もとはなち、多くの網ども焼き捨てて、永く殺生をとどめて仏をあがめたてまつりけり。これらをまことの善知識にあへる人と申すなり。

また、源兼長[175]が思はしき妻をもちたりけるが、二三日が程なる所へ行きけるに、やがてかへらんとするよしを、かへすがへすかたらひおきて、程なくかへりて見れば、綿綿は門に[176]たちて嘆き悲しむほどに、いかなる事ぞといひければ、御前は昨夜失せさせ給ひて、やがて鳥部野へ送りまいらせぬ、といふを聞き、心も失せまどひ、踏むところもおぼえざりけれども、すなわち、野辺に行きて見れば、長やかなる髪つきながら、新しき頭を犬かかへて食らひののしるを見て、命も失せぬべく悲しかりしかども、心を引きかへて法師になりてかくぞ詠みける、

73ありしこそかぎりなりけれあふ事をなど後の世と契らざりけん

かくてながく仏道を修行しけり。

大江定基が思はしき妻に後れて、法師になりて、もろこしまでまかりけるが、母のために高雄の寺[177]にて八講おこなひて、静照法橋を請じて説法させける。名句に、日の東に出でんを見ては、母の古郷にある事を忘れざれ。月の西に傾かんをみては、上人、他の国にある事を思ひ出でよ、といはれしを聞く人、ありがたく忍びがたくや思ひけん。あるいは、車のうちより髪をきりて出だすものもあり。あるいは、笠の下よりもとどりを切りて出だすものもあり。かれこれ五百余人あり。かくのごとく憂き目を見、悲しき事にあひて出家遁世するものをば、仏は、善知識にあへるものなるぞ、と[178]とき給へる。はやくいそぎ善知識にあひて、年の若き時つとめ行じて仏になり給ふべし。

7　十二門開示　十　臨終正念

第十に臨終に悪念をとどめて仏に成るべし、と申すは、たとひ竹馬の時より八十あまりにおよぶまで忍辱精進して念仏諸経[179]恭敬礼拝するとも、臨終の時、一念の妄心をおこせば、かならず生死に輪廻すべきなり。ある長者のこがねの釜をもちたりけるを、臨終の時、一念惜しと思ひしによりて大蛇となりてわだかまりぬ。また、舎衛国の女、鏡を見て我影よしと思ひしゆゑに、かつたゐ[180]のなかの虫となれり。されば、臨終の時、思はしからんめこなどや、心とまりぬ[181]べき宝などをば、見すべからずとは申しぬれ。

無空[182]律師は天井に二十貫文の料足置きたりしを、臨終の時、あながち惜しとは思はねども、何となく思ひ出しけるゆゑに、蛇になりて天井に住む。年ごろの檀那枇杷の大臣の夢に、われ命終の時、一念の[183]妄心によつて天井に置きたる銭の中にあり。はやくかの銭をとりて三宝を供養せよ、と見えければ、大臣夢さめてやがて律師の坊に行きて天井を見れば、二十貫文の料足あり。その中[184]にちひさき蛇[185]あり。大臣涙を流して、かの料足をもつて法花経を書き供養してたてまつりける。夜の夢に、この功徳によりて得脱しぬるよしをいひて、[186]その後は蛇[187]見えず。されば、花をのみ愛するものは胡蝶になり、鳥を飼ふものは畜生にむまるるなり。

はらない国[188]に頭陀と云人のありけるが、仏に申さく、いかなれば百年功徳をつくる[189]物の地獄におち、百年罪をつくる物の仏になる、と申しければ、仏告げてのたまはく、百年功徳をつくるものの地獄におつる事は、臨終の時、悪念をおこすゆゑなり。百年罪をつくる人の仏になるは、命終の時、弥陀を称念するゆゑなり、とぞおほせありける。このことはりをしりて、夢まぼろしの世の中を厭ひて、心をとど

（九三）

め身を惜しまずして、一筋に弥陀を称して往生の素懐をとげ給ふべきなり。

7　十二門開示　十一　法華経

第十一に、法花経を修行して仏になるべし、と申すは、三世の諸仏出世の本懐、一切衆生成仏の直道はこの経なり。されば、五障の女人も仏になれるなり。しかるに、この経を書き供養しける料紙を市にて買ひたる女人さへ、冥途の闇はれぬ。硯の水を入るる結縁さへ、地獄のほのほきゆるなり。無二亦無三、法花経第一、ととき給ふ。渡りに船を得たるがごとく、子の母にあへるがごとくにたのみて、はやく受持・読誦・解説[190]・書写して仏になり給ふべし。一聞法花経決定菩提、といへり。よくたもちおこなひて、往生の願をとげ給ふべきなり。仏も歓喜し、神も随喜し給ふなり。このゆゑに伝教大師、これを講ずれば八幡大菩薩、紫の袈裟を施し、空也上人、これを読みしかば、松尾の大明神、寒風を防ぎ給ひき。いはんや、後の世のたすけとなる事申すにおよばず。

愛宕の成尋阿闍梨は、暁、法花経を読みゐたりければ、都卒天人、道場に立ち添ひけるに[191]、傍らの坊の人の目に見え給ひければ、皆不思議にぞ思ひける。これはことに近き事にあらずや。昔、提婆菩薩、獅子国にましまして、ある海のほとりを通り給ふとて見給へば、五百[192]餓鬼あり。かれら苦しみのあるよしをなげきけり。聞くにつけ見るにつけて、あはれに無残に思し召して、法花経を一品ばかり読み給ひければ、餓鬼聴聞して悲しみの涙を流して拝みたてまつりけり。そののち、菩薩の夢に、五百の天人、相好瑞厳にして、身には微妙の瓔珞をかけ、空より来たりては我を拝みける程に、あやしみて、いかな

る人ぞ、ととはれければ、天人こたへていはく、われらは獅子国に百千劫の間、世にたへがたき苦しみを受けたりし餓鬼どもなりしが、菩薩の法花経を読み給ひしを聴聞したりしゆゑに、みな忉利天に生まれたるなり。今よりのちは悪道へかへるべからず、仏道を修行すべし、とよろこびけり。[193] されば、うはなりの読む経をとりつぎたりし結縁さへ、天より光をはなつ。はやく信をいたして読み給ふべきなり。

また、後の世までは申すにおよばず。関白頼通は具平親王の御むすめをすてて三條院の御むこになり給ひしに、関白、御物の怪の病をして大事になり給ひける間、験者には心誉僧都・みやうけん[194]阿闍梨、陰陽師には賀茂光栄・安部吉平などまゐりて、声を立て力を尽くししかども、しるしなくてすでに引き入り給ひしに、頼通の御父御室の関白道長、みづから法花経の寿量品をかみ一枚ばかり二三返読み給ひて、かほにかほをあてて泣き給ひければ、頼通のもとの御舅、具平親王のあらわれ給ひて、たれも子のいとほしく悲しさは同じ事なり。我はかなくなりて後、わがむすめをすて、たよりなく物を思はせ給ふがうらめしければ、たすけたてまつらじ、と思へども、法花経に勝たざりたてまつりて、このたびはかへるなり、とぞのたまひける。さて、もとの北の政所へ御迎ひ車をまゐらせて、このよしを申させ給ひたりければ、恩愛の道はこの世ばかりといひながら、草の陰までもこれ程にあさからずおぼしめしけるよ、と御涙にむせび給ひておはしけるを、やうやういさめまゐらせ、御車にのせ[195]られていらせ給ひぬ。頼通の御やまひなほらせ給ひてのち、公達あまたわたらせ給ひける。[196] 今にいたるまで関白殿下ともうすは、その御子孫なり。悪霊邪気もおそれたてまつるは、法花経なり。いかでか冥官・冥道勝たざりたてまつる事なからん。されば、現世安穏まのあたりに証拠あり。後生善処なほうたがひあるべからず。無二亦無三のこころを和泉式部がよめる、

（九五）

74ふたつなくみつなき法を聞きつれば五つのさはりあらじとぞ思ふ

藤原清輔朝臣のよめる、

75ふたつなきみのりの舟ぞたのもしき人のさらでも渡すと思へば[197]

かへすがへすこの経を信仰したてまつりて、仏道をなし給ふべし。

7　十二門開示　十二　称念弥陀

第十二に、弥陀を称念して極楽に往生し給ふべし、と申すは、恵心僧都の往生要集には五念門をたてたり。諸仏菩薩も仏道を求むる人をば、阿弥陀仏、ここへまゐれ[198]、とをしへ給へり。薬師は、八菩薩をして極楽へおくらん、と誓ひ給ふ。観音は、わが本地[199]阿弥陀如来を念じたてまつれ、とをしへ給ふなり。しかのみならず、諸教所讃多在弥陀とて、八万聖教の中にも弥陀の功徳すぐれたり、とぞほめたてまつりける。[200]もろもろの菩薩、仏に申し給ふやう、いかにしてか濁世末代の衆生、たやすく仏になるべき、ととひたてまつり給へば、仏のたまはく、百八の木欒珠をつらぬきて、弥陀の名号をとなへよ、とぞおほせありける。かへすがへすうたがひをなす事なくして、ある時は西方にむかひて礼拝して、[201]ある時は声をあげて名号をとなへ、ある時はまなこをふさぎて弥陀の光明を観ぜよ。頭の髪に火のつきたるを消す[202]がごとく、後の世のいとなみをすべし。明日を待つ事なかれ。

たとへば、人の道をゆかんに、盗人にあひてものをとられじ、とて逃げ走るに、跡より盗人おひきた[203]る程に、おほきなる河ありき。着たる物を脱ぎて渡らば、河におぼれて死なんずらん、と思ふごとくお

もひまじゆる事なく弥陀を称念し、[204]極楽をねがふべきなり。たとへば、たのしき人の子のあやしの人に盗まれて外の国にゆきて、しもべとなりてつかはるるが、いかにもして親のかたへゆかばや、と思ふがごとく弥陀を称念じ[205]て極楽へ往生すべし。善導和尚の定に入りて極楽を念じ給ひけるには、弥陀如来かならず現じて物語りし給ひける。このよしをきき、導綽禅師の往生すべき事をとひたてまつり給ひければ、たとへをとりてをしへ給ひけり。木をきる時は、[206]はやく斧をくだせ。家にかへらんをりは、つかれを忘れよ。木をきるに斧をおそくくだせば、はやくきる事なし。家にかへるにつかれを思ひて道にやすみやすみぬれば、おそくかへるなり。されば、おこたる事なく道を行くがごとく弥陀を念じ、極楽をねがふべし。極楽を念ずる聖に人の物をとひければ、ただいま一大事あり、とぞ申しける。極楽をねがはん人は、かの聖のやうにこそあらまほしき事なれ。

また、天竺震旦の事は申すにおよばず、吾朝にも行業をつみて往生の素懐をとげし人おほし。ことごとくしるしつくすべからず。しかれども、これも念仏年つもりたる人ともなれば、ことはりなり。ただ一念のちからによりて往生したる人の事は[207]少少申すべし。讃岐国多度の郡に源大夫といふものあり。狩せんとて野に出でけるが、時雨のしければ、人里のあるところにはしりゆきて、見れば多くの人集まりて寺にて講おこなひけるを、これは何事をするぞ、ととひければ、講おこなふよしを申しける。[208]講とは何事ぞ、ととへば、仏に物を申すなり、といふ。仏とはいかなるものぞ、といひければ、講おこなひける僧、仏とはこれより西方に極楽といふ国のあるじとて[209]おはしますなり。阿弥陀仏といふその御名をとなへて心にかけたてまつれば、命のをはる時、かならず来たり給ひて、極楽へむかへ給ふなり、といひければ、いざさらば、われもゆかん、とて法師になりて西にむかひて阿弥陀仏、阿弥陀仏、ととなへて

（九七）

あゆみさりぬ。講おこなひける僧、あまた不思議に思ひて、その跡[210]つきて見おくりければ、海のほとりに松の木のあるにのぼりて、西にむかひて死にたり。ちかくよりて見れば口より青蓮花おひて、異香くんじてぞありける。

されば、心ざしせちにあれば、一念の功力にてかならずかならず往生すべきなり。されば、ふるき詩にもかくこそつくりけれ。

十悪といふともなほ引接す。疾風の雲霧をひらくよりはなはだし。一年といふともなほ感応す。巨海の涓露をいるるにたとふ

ともかき給へり。されば、この心は、十悪の衆生をもみちびき給ふ事は、風の雲霧をはらふよりもはやし。一念の衆生をもすくひ給ふ事は、大海のすこしきながれをいとはざるがごとし、といふなり。十悪五逆のものさへ弥陀の悲願にはもれず。いはんや弥陀をたのみたてまつり、一生の間称念せんものにおいてをや。

弥陀如来、観音・勢至を具し給ひて、来迎引接し給はん時をおもひやり給ふべし。万徳荘厳の教主、西方にあらはれ九品蓮台の聖衆、紫雲にのりて[211]斜めにくだり、光明赫奕として十方世界をてらし、異香ふんぷんとして草木みな沈檀のにほひをなす。観音、法蓮台をかたぶけ給ふ。勢至、手をさづけて引接し給ふ。伎楽歌詠のこゑ耳にみち、無数の天衆まなこにさへぎり、宝のはちす雨と[212]ふりて柴の庵をうづみ、讃談のこゑ歓喜の涙をもよほすなり。すでに仏の心にしたがひ、聖衆の中にまじはり、須臾の間に安養の宝池にいたり無量のたのしみをうるなり。八功徳池には四色の蓮華ひらきて色色の光をはなち、七重宝樹には花さきこのみむすびて聖衆かげにあそびたまひ、鳧・雁・鴛鴦さへづり、簫・笛・琴・箜

篌は微妙音楽をととのへ、琵琶・鐃・銅鈸は奇異のしらべをそうす。波の音、かぜの声まで仏道増進の妙文をとなへ、一切草木はみな栴檀の匂ひをなせり。むかしつたへききし御法文を直に耳にふれ、いにしへ観ぜし御姿まのあたり[213]おがみたてまつり、十方世界に遊行して三世の諸仏を供養し、七世の恩所をみちびき、有縁無縁をとぶらふ。称讃浄土経には、百千倶胝那由他劫をへ[214]、無量千倶胝那由他の舌をもつて、一一の舌の上に無量の声をいだして、ほむともほむとも、弥陀の名号の功徳をばほめつくすべからず、と申しけり。往生要集の十楽をしるすに、百千万のたのしみなりとも、十楽のうち一つにはをよぶべからず、といへり。

されば、あやしの舌のはしにて、中中申さん事こそおろかなれ。かへすがへす弥陀を念じて、かばかりめでたき浄土へまゐり給ふべきなり。心ある人の、極楽をねがひし事を歌にて申すべし。

76いかにして蓮の花にやどりなん世をうき葉にはすむかひもなし

77極楽の蓮の花の上にこそ露のわが身はおかまほしけれ

右大臣兼実がよめる、

78花はみなあかぬ中にもこん世までゆかしき物は蓮なりけり

8　語りの結び

かやうにこの僧かたりはてて、南無西方極楽世界弥陀如来、来迎引接たがへ給ふな、南無九品蓮台清浄大海衆如来とともに迎へ給へ、とて夜のあくるとひとしく行方しらずなりにけり。

（九九）

跋

のちにこれを思ふに、ひとへに嵯峨の釈迦如来、かりに一人の僧に現じ給ひてしめし給ひけり、としりぬ。されば、魔縁は人の目をまよはせども、かげをばしらず。われらもつとめおこなはばうたがひあるべからず。たとへば、金をのべてふたつのうつわ物をつくりて、ひとつをば清浄にしてのごひみがけばいよいよ光をまし、今ひとつをばすてをきてきよむる事なければ、光なくなりて見るところはべちなれども、そのこがねのまことのたいはひとつなるがごとく、三世の諸仏三身万徳の功徳は、われも人もそなはりたれども、妄想不浄のちりにまじはりて、いよいよ着心をなして、つたなき身となるなり。仏はこのちりをはらひ給ひて、禅定智恵をみがき給へば、究竟菩提をあらはして、一切衆生は我が身なりけりとさとりて、われら衆生をあはれみ給ふなり。まことにその実相はただ一なり。

衆生といひ、仏といふは、まよへるとさとれるとのかはりめなり。法性真如のことはりは、十方の仏も一切衆生も具したれども、妄念にまどはされ、うたがひの心にとらかされて、生死にしづめり。この妄想をとどめて、わが身の仏性を観ずべきなり。心ざしいたりぬれば、じねんに仏と衆生とへだてなき所をさとりしるべし。別に仏の子孫なし。みな衆生のうちより出で給ふ。[215]

ことに、この観念は女人のすべき事なり。そのゆへは、女人は難行苦行をも行ぜず、経論・聖教をひらきて見る事もかたき身なれば、成仏の縁すくなきなり。心をおこし、気にしたがひて、あるいは一日二日、あるいは一月二月、もしくは一年二年、もしは五年十年のあひだも観念をいたさば、仏と衆生と差別なき事をさとりしるべきなり。これぞまことの仏道修行とは申すめる。観はこれ智恵のつるぎ、欲[216]

煩悩のきづなをきる。行はこれ禅定の火、たちまち生死のさかひをやきうしなふものなり。よくよく修行して、ながく仏法の宝をまうけ給ふべきなり。いま人界をうくるものは、宝の山に入りたるがごとし。あひかまへて手をむなしくして、三途の古郷に帰る事なかれ。[217]

宝物集物語　下

1 おこし＝他六本「おこして」
2 善見＝松・小・宮は漢字で「善現」、大系「善見」、平三、おう「善現」
3 きえうせぬ＝底「きえす」、他七本により改む。平三「きへうせぬ」
4 すぐれたり＝底「須とくすくれたる」、他七本により改む。平三「すくれたり」
5 弥勒大士＝小「弥伽大士」、平三・大系・おう「弥伽大士」
6 富めるもの＝他六本「とめる人」、平三「富めるもの」
7 「給ひて」と「十二年」の間、他六本に次の異同あり。「たたひとりだんとくせんにいり給ひ、十九にてしゆつけしたまひて」なお、六本間でも「十九にて」の「にて」、小は補入、簗・細ナシ。平三には異同ナシ。
8 小野小町＝大系・おう「小大君」
9 我少＝底「我等」、他六本により改む。平三「我少」
10 とく仏に＝底「仏に」、他六本により改む。平三「とく仏に」
11 一切＝他六本「一切の」
12 たのみ＝他七本「たのみを」、平三「たのみを」
13 みゆる＝他六本「見みゆる」
14 ごとくに＝底「ことに」、他七本により改む。

（一〇一）

15 かならず＝底「かならは」、他七本により改む。
16 や入りなまし＝平三「ぞ入りぬべき」
17 はるかに＝底「はるに」、他七本により改む。平三「はるかに」
18 のたまへば＝他七本「のたまへり」、平三「の給へり」
19 およばず＝底「よらず」、他七本により改む。平三「申におよはす」
20 今世後世の引導＝底「今世後世ういんたう」、他七本により改む。
21 利生を＝底「りうやうを」、他六本により改む。平三は「今世後世の引導の利生」にあたる部分、「引導の利生」とあり。
22 まぬかれ＝他六本「かれ」、平三「まぬかれ」
23 晨朝＝底「しんてん」、他七本により改む。
24 のたまふなり＝他六本「のたまへるなり」、平三「のたまふ也」
25 ありき＝他六本「あり」、平三「ありしか」
26 へて＝他七本「へに」、平三「ふるに」
27 給へる＝上・松・小・細・簗「給へり」、宮・萩「給ひぬ」、平三「たまふ」
28 河辺＝他七本「河原」、平三「河原」
29 ゑぞ寺＝平三「しふてら」、おう「シフ寺」、大系「ゑふでら」
30 地蔵講をぞ＝他六本「かうを」、平三「地蔵講を」
31 冷泉河原＝松・小・細・簗・萩「われはれいせんかはら」、宮「われはすすかかわ」、平三「われは冷泉河原」
32 たてまつりけり＝底「たてまつり」、他七本により改む。平三「奉けり」
33 たてまつるべきなり＝底「たてまつるへし也」、上により改む。他六本「たてまつるへし」、平三「奉るへし」
34 かぎりの＝他六本「かきり」、平三「かきり」
35 見まゐらせけれども＝松・小・細・梁「みまはせとも」、宮「見まはれとも」、萩「見まいらせらるとも」、平三「見まはし給へとも」
36 師は三世の＝小・細・簗・宮・萩「三世の」、平三「師は三世の」

（一〇二）

37 いひければ＝松・小・細・簗・萩「いひけれとも」、宮「いふされとも」、平三「の給へとも」
38 渡らせ＝底「渡り」、他七本により改む。平三「わたらせ」
39 鼎＝底「なかへ」、他七本により改む。
40 右大臣＝他六本「右大弁」、大系・おう「右大臣」
41 あひ＝他六本「ゆきあひ」
42 満て＝小「よみて」、萩「よみてたび給ひて」
43 もしは＝底「もし」、他六本により改む。
44 むまれき＝底「むまれて」、上・小・細・簗・宮・宮・萩により改む。
45 戒をたもてるものは～成就す＝松・小・細・簗「戒をもたざるものは～成就せず」、宮・萩・平三「戒をたもたざるものは～成就せず」
46 妄語、飲酒＝松・小・細・簗・萩「飲酒、妄語」
47 殺の報＝他六本ナシ。
48 鬼のごとし＝松・小・細・簗・宮「鬼のごとしとき給へり。まことに」、萩「鬼のごとしとのべたまへけり。まことに」
49 殺させんする＝他六本「殺させんとする」
50 譬喩経に＝底「譬喩経を」、他七本により改む。
51 おこる罪＝底「おこると罪」、他六本により改む。
52 得べしなり＝松・小・萩「うけへし」、細・簗・宮「うくへし」
53 行業＝底「行幸」、上・小により改む。
54 ける＝底「けり」、他六本により改む。
55 鹿母夫人＝底・他七本すべて「かもふにん」、平三「かも夫人」
56 迦毘羅＝底「かひら」、他六本「きやひら」
57 仏の＝松・小・宮・萩「仏のはくの」、細・簗「ほとけかのはく」
58 ける＝底・上「けり」、他六本により改む。

（一〇三）

59 阿育＝松・小・細・簗・萩「あゆく」
60 これら＝松・小・宮・萩「我ら」、細・簗「われら」
61 おこし＝松「起して」、細・簗・萩「おこして」
62 まうて＝他七本「まうてゝ」
63 えさせしめ＝他六本「えせしめ」
64 かたち＝他七本「人」
65 給へり＝他七本により改む。
66 説法を＝松・小「説法」、細・簗・萩・宮「せつほう」
67 いとなみしに＝他六本「いとなむ」
68 檀金＝底、ふりがな「だんこん」、大系・平三「端厳」
69 そののち＝松・小・宮・萩ナシ。
70 せんしやく比丘＝大系「せんさく比丘尼」・平三「善積比丘」。正しくは「せんはく比丘尼」
71 公経＝他六本「こうけい」
72 ちかごと＝小・萩「ちかいこと」
73 ちか事＝小・宮・萩「ちかいこと」
74 をしへ＝小・松・宮「経」、細・簗・萩「きやう」
75 経文を＝松・小「経を」、細・簗「きやうを」、宮「きやうに」、萩ナシ。
76 たのしみは＝小・宮・萩「たのしみ」
77 経文＝松・小「経」、細・簗・宮・萩「きやう」
78 八億＝松「八萬」、宮・萩「八まん」
79 業となる＝松・小・宮・萩「こう也」、細・簗「こうなり」
80 いはんや＝松・萩ナシ、宮「いはんや生生世世の業をや」ナシ。
81 欲＝底・他七本のママ。「能く」か。
82 懺悔すれば＝底「さむけされは」、他七本により改む。

（一〇四）

83 渡る＝松・小・宮・萩「わたす」
84 なりとも＝松・小「成といへ共」、細・簗「なりといへ共」、萩「なりといへとも」
85 よめる＝松「読り」、細・簗・宮「よめり」、萩「つくり給ふ」、小ナシ。
86 百千万＝松・小・萩「五千万」、宮「五百万」
87 あつめたるより＝他六本「あつめたるよりも」
88 なして＝小・宮・萩「なし」
89 おさめる＝他七本「おさむる」
90 干つまりたる池の水に＝底「ひつり池」、上「ひろまりたる池の水に」、松・小「ひつまりたる池水に」、細・簗「ひつまりたるいけのみつに」、宮・萩「ひつまりたるいけみつに」、諸本により改む。
91 はなちたる＝上・小・松・細・簗「はなちける」、萩「はなち」
92 給ひしかば＝他六本「給ひし」
93 まつりごと＝松・小・宮・萩「まつり」
94 むまるると＝底「むまると」、他六本により改む。
95 賤の女なんども＝松・小・宮「しつのめなとも」、細・簗「しつのめなりとも」、萩「しつめなとも」
96 よく＝松・小「能々」、宮・萩「よく〳〵」
97 乳母＝平三「父母」
98 高祖＝他六本「かうそと」
99 のたまへり＝他六本「のへ給へり」
100 火丸＝底「ひまろ」、松・小「火丸」により改む。細・簗「ひまつ」、宮「ひまる」、萩「ひのまる」
101 妻をもちたり＝底「めをもちもちたり」、他七本により改む。
102 京上しける＝細・簗「きやうのほりしける」、萩「しやうらくしける」、宮「京のほりしてける」
103 火丸＝底「ひまろ」、松・小により改む。細・簗「ひまつ」、宮・萩「ひまる」
104 子の大地へ＝松・小「此大地のそこへ」、細・簗「この大ちの底へ」、宮「此の大ちのそこへ」、萩「此の地のそこへ」
105 火丸＝底「ひまろ」、松・小により改む。細・簗「ひまつ」、宮・萩「ひまる」

（一〇五）

106 鳧雁鴛鴦＝底「ふがゑんなう」、諸本により改む。小「鳧雁鴛鴦」、松・細・簗「ふがんゑんなう」、宮「ふがんゑんなう」に「鳧雁鴛鴦」を振り漢字、萩「ふかんゑんわう」

107 三千仏の＝底「三千仏を」、他七本により改む。

108 よめる＝松「読り」、細・簗「よめり」、宮ナシ。

109 つみは＝他六本「つみも」

110 ごとし＝他六本「ことく」

111 土石＝細・簗・萩・宮「つちいし」、小「ツチイシ」と振り仮名

112 をしまざれ＝簗「おしまれ」、萩「おしますおもへと」

113 たてまつりて＝松「たまへりて」、萩「給へり」、宮「給ひて」

114 たりけるが＝松・小・細・簗・宮「たりける」、萩「たりけり」

115 貧女の＝松・小「ひん女か」、細・簗「貧女か」、宮・萩「にんによか」

116 伽毘羅城＝松・小・細・簗・萩「きやひらしやう」

117 宝にてこそ＝底「宝にて」、他六本により改む。

118 けり＝底「ける」、他六本により改む。

119 とへば＝他六本「とひけれは」

120 おほやけに＝松・小・細・簗・萩「おほやけ」、宮「大やけ」に振り漢字「公」

121 あびせ＝松・小・細「あむせ」

122 すり給ひけるに＝松・小・萩「すり給ひける」

123 うせけり＝松・小・簗・宮・萩「うせにけり」、細「けり」

124 かの＝松・小「彼后の」、宮・萩「かのきさきの」

125 仏、施＝松・小・細・萩「ほとけせ」、簗「ほとけのせ」、宮「ふつせ」

126 瓦礫と＝小「瓦小石と」に「ツブテコイシ」と振り漢字、宮「をほんくわと」

127 いづれも＝松・萩「いつも」

128 功徳はかくの＝底「くとくはかの」、他七本により改む。

129 宝を＝松・小・萩「たからと」、宮「たからに」
130 ほしがりし＝宮「ともしかりし」
131 大梵和雅＝底「大ほんわか」、松「大をんわげの」、細・簗「大の」、宮「大おんわけの（ふり漢字「音和雅」）」、萩「大をんわげの」、平三・大系「大梵和雅」
132 楽しみの＝底「たのしみ」、他七本により改む。
133 くはしく＝他六本「くはしくは」
134 我が身のうちの真如実相を観じ、あるいは＝底ナシ。目移りによる誤脱か。上により補う。
135 月の光＝松・小・細・簗・萩「月ひかり」
136 はなれ＝他七本「はなれて」
137 このみを＝他六本「このみ」
138 心の月輪＝松・細・簗・宮・萩「心月輪」
139 観念を＝他六本「観念は」
140 観念すべし＝他六本「観念すべき」
141 所へ＝他六本「所に」
142 日もくれて＝他六本「日くれて」
143 これも＝他六本「それも」
144 くらくて＝他六本「くらくておそろしかりけれはこのつかあなにいりて」
145 かの穴に＝他六本ナシ。
146 ところに＝他六本「ときに」
147 夜も＝他六本「夜」
148 まどひ＝上「まとひけれは」、他六本「まとひぬれは」
149 おもへば＝他六本「おもへとも」
150 なりぬれども＝他六本「なりぬれは」
151 しる＝松・小・細・簗・萩「しり」、宮「しるなり」

（一〇七）

152 よめる＝松・細・簗・萩・宮「よめり」、小ナシ。
153 むしやう＝「無性」か。小「無量」、おう・平三「無始生死」
154 いたれるなり＝松・小・細・簗・宮「いたれり」、萩「いたれる」
155 いひければ＝他七本「いひけれはこれも」
156 観じける＝底「くはんける」、他七本により改む。
157 わが身も＝底「わか身」、他七本により改む。
158 よろづ＝松・小・細・簗・萩「よろつの」
159 貴賤＝松・小・細・簗・宮「貴賤の」
160 なりて＝他六本「かはりて」
161 西南＝他六本「西東」
162 東北＝松・小・細・簗・萩「北南に」、宮「きたみなみへ」
163 香を＝他七本「香」
164 おこせば＝他七本「くれは」
165 もちひぬもの＝底「もちひぬもちひぬもの」、上・松・小・細・簗・萩により改む。なお、宮「もの」
166 花色比丘尼＝底「そしき比丘」、松・小・宮・萩「けしきひく」、大系「花色比丘尼」により改む。おう「華色比丘尼」
167 心ざし＝底「心なし」、他七本により改む。
168 はなたいゑ国＝松「三たいらん国」、小「なたいらん国」、細「なたはゑこく」、宮・萩「なたいらんこく」、平三・大系・おう「珊提嵐国」
169 無静念王＝平三「無諍念王」、大系「無上念王」、おう「無諍念王」
170 法界梵士＝平三・大系・おう「法海梵士」
171 大くなうを＝他六本「大くなうをのみ」
172 不動国のこんしゆ太子＝平三「ぶだうこくのこんじゆ太子」、大系「不動国の金字太子」
173 源顕法眼＝細・簗「じんけんほうけん」、宮「けんけいほうけん」、平三「満賢法眼」、大系「法眼源賢」、おう「法

（一〇八）

174 師ノ源賢」
175 ありしが＝底「ありしは」、他七本により改む。
176 源兼長＝底「みなもとのかねなり」、松・小・宮・萩により改む。平三・大系「源兼長」。なお、細・簗「みなもとのかねつね」
177 綿綿は門に＝松・小「めらはかどに」、細・簗「めはかどに」、宮・萩「めらはかどに」
178 高雄の寺＝平三「高尾のてら」、大系「山崎宝寺」
179 ものなるぞ、と＝他七本「ものなりとそ」
180 諸経＝他六本「しよきやうを」
181 かつたゐ＝底「かつかい」、松・小・宮・萩により改む。
182 とまりぬ＝松・小・細・簗「ととまりぬ」、宮「とどまりぬへき」、萩「ととまりつへしき」
183 無空＝大系によりこの漢字を宛てる。
184 一念の＝松・小・細・簗・萩「一念」
185 其＝他六本「此（この）」
186 蛇＝他六本「くちなは」
187 いひて＝底「いて」、他七本により改む。
188 蛇＝他六本「くちなは」
189 はらない国＝大系「波羅奈国」
190 功徳を＝底「功徳」、他七本により改む。
191 解説＝他六本「げせつ」
192 けるに＝他六本「けるか」
193 五百＝松・小・細・簗・萩「五百の」、宮「五百人の」
194 すべしとよろこびけり＝他六本「すべしとぞよろこびける」
195 みやうけん＝松・小・宮・萩「みやうそん」、大系・おう「明尊」
御車にのせ＝他七本「御車にたすけのせ」

（一〇九）

196 らせ給ひてのち、公達あまたわたらせ給ひける＝上により補う。
197 人のさらでも＝他六本「人もさらても」
198 ここ＝松・小・宮・萩「極楽」
199 本地＝小「ほんし」、大系「本師」
200 たてまつりける＝松・小・細・簗・萩「たてまつりけり」、宮「給へり」
201 礼拝して＝他六本「礼拝し」
202 消す＝底「けつる」、他七本により改む。
203 ことく＝宮「ことに又」、松・小・細・簗・萩「ことく又」
204 称念し＝上「称念し」、松・小「唱へ念し」、宮・萩「となへ念し」
205 称念じ＝松・小「となへ念じ」、宮「念じて」、萩「となへねんして」
206 時は＝他七本「時には」
207 事は＝他六本「事」
208 申しける＝松・小・細・簗・萩「申しけり」
209 とて＝他七本「にて」
210 跡＝他七本「跡に」
211 紫雲に＝底「紫雲の」、他七本により改む。
212 雨と＝底「雨」、他七本により改む。
213 まのあたり＝他六本「まのあたりに」
214 倶胝那由他劫をへ＝他七本「倶胝那由他劫をへて」
215 出で給ふ＝他六本「出で給へり」
216 欲＝底・他七本のママ。「能く」か。
217 たちまち＝他六本「たちまちに」

『宝物集』要目および和歌諸本対照表

凡例

・本対照表は、二巻本の読解の便を図るために、諸系統との頁数ならび和歌番号を対照させたものである。
・二巻本はこの北大本校訂本の頁数
・和歌は原則として二巻本所載のもののみであり、宝物集の全和歌を網羅的に記してはいない。
・一巻本は月島直子・雅幸編『宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引』の翻字本文（汲古書院・平成5）の頁数
・平仮名整版三巻本は『宝物集研究』第三集所収翻刻本文の頁数
・片仮名三巻本は山田・大場・森・編（おうふう・平7）本の頁数
・七巻本は小泉・山田・校注（新日本古典文学大系40・岩波書店・1993）本の頁数

	要目	二巻本 和歌初句・巻・頁	二巻本 歌	一巻本 頁	一巻本 歌	平仮名三巻 巻・頁	平仮名三巻 歌	片仮名三巻本 巻・頁	片仮名三巻本 歌	七巻本・大系 巻・頁	七巻本・大系 歌
1	島から帰ってきた隱士	上 4				上 51上		上 7		一 3	
2	釈迦堂参詣の道行	5				51下		8		4	
3	釈迦像の由来	5				52上		14		11	
4	宝物の論	7				52上		16		14	
	1 隱蓑が宝	7		79		52上		16		14	
	2 打出の小槌が宝	8		79		52下		17		15	
	3 打出の小槌は宝にあらず	8		80		52下		17		15	
	4 金が宝	すべらぎの 8	1			52下 53上	1	18 18	14	16 16	14
	5 金は宝にあらず	9				53上		19		18	
	6 玉が宝	10				53下		21		20	
	7 玉は宝にあらず	10				53下		23		22	

要目	二巻本	一巻本	平仮名三巻	片仮名三巻本	七巻本・大系
8子が宝	いつかたに かはり行くと いつとてもし 玉くしげ かぎりあれば 思ひかね 藤衣 鳥部山 11	80	53下 54上 54上 54上 55下 56上 56上 56上 56上 56上 9 8 7 6 5 4 3 2	24 29 29 29 29 29 9 8 7 6 5 4 3 2	23 24 24 24 30 30 31 31 31 26 25 23 22 21 18 17 16
9子は宝にあらず	14	84	56下	31	33
10命が宝	うら山し 会ふまでと 15		57上 57上 57下 11 10	35 |	45 39 38 62 36
11命は宝にあらず	16		57下	38	45
5					
仏法が宝	16	88	57下	41	51
1善安王のさとし	17		58上	41	51
2仏法遭い難し	18	88	58下	43	53
3諸法空・諸行無常 1維摩の十喩	19 19	89 90	59上 59上 59下 59下 12	44 45 45 42	54 55 55 76
2荘周の夢	手にむすぶ 長き夜の 百年は 21	| | |	59下 60下 60下 13 14	46 46 | 44	57 | |

要目	二巻本	一巻本	平仮名三巻	片仮名三巻本	七巻本・大系
夜もすがら	15		60下		
山の端に	16		61上		
この世だに	17		61下		
長き世の	18		61下		
3二人三餅の譬喩	19		62上		
いつまでと	19		62上		
4善女の四理	20		62上		
思ひ出づる	20		62下		
5人命おぼつかなし	21		62下		
きえはてん	21		62下		
6飛花落葉	22		63上	50	65
はかなさを	22		63上	50	65
世のうさに	23		63上	50	65
6					
六道	25	92	63上	51	66
1地獄（道）	26	93	63下	51	69
いふならく	24	5	64下	54	69
あさましや	25		64下	54	69
2餓鬼道	28	97	65上	55	71
河をみて	26		65上	56	70
3畜生道	28	98	65下	57	71
おく山の	27		66上	59	73
4修羅道	29	100	66下	57	74
5人道	30	100	66下	58	74

要目	二巻本	一巻本	平仮名三巻	片仮名三巻本	七巻本・大系
1生苦	むねにみつ	100	66下	58	75
2老苦	明日までも	101	67上	58	76
3病苦	いにしへは	101	67上	58	76
	おぼつかな		67上	59	77
	はかなしな		67上	59	77
	紅の		67上	59	76
4死苦	30	103	67上	59	77
	31		67上	59	77
	28		67上	59	77
	29		67上	59	91
	30		67上	59	91
	31		67上	59	91
	32		67上	59	91
	33		67上	59	91
	34		67上	59	91
	35		67下	59	89
	36		68下	61	86
	37		70上	63	84
	38		70上	63	77
	39		70上	63	77
	さりともと		70上	63	76
	草枕		70上	63	77
	人の身を		70上	63	77
	皆人の		70上	63	77
	思ひきや		70下	64	76
	野辺見れば		70下	64	76
5怨憎会苦	36	117	70下	64	75
	40		70下	64	92
	41		70下	64	93
	42		70下	64	93
	43		71上	64	95
	44		71上	64	95
	45		71上	64	96
	46		71上	64	96
	47		71上	64	96
	花ちらす		71上	64	91
	月影の		71上	64	91
	ながむれば		71上	64	91
	夢にだに		71上	64	91
	いとはるる		71上	64	91
	さきの夜の		71上	64	91
	契りしに		71上	64	91
	さのみやは		71下	64	91

中

要目	二巻本	一巻本	平仮名三巻	片仮名三巻本	七巻本・大系
7					
6 愛別離苦	よしさらば	105	71下	73	107
	いにしへの		71下		111
	よひのまに		71上	74	113
	さつまがた		72上		116
	たらちねや		72上	76	122
	人のうへと		72上		123
	時雨こそ		72上	79	124
	おくれても	111	72下	80	124
	みるからに		72下		125
	あやめ草		72下	80	124
	おもひやれ		72下		125
	みな人は	112	73上	82	126
	深草の		73下		127
7 求不得苦	身にまさる	124	74上	82	132
	身にまさる		74上		133
	けふのみと		74下	82	133
	君なくて		74下	82	133
8 五盛陰苦		129	75下	87	140
6 天道			76上	89	142
十二門開示		133	77上	91	144
1 道心	45		77下	94	149
1 発菩提心の功徳	57 下	135	78上	95	150 四

要目	二巻本		一巻本		平仮名三巻		片仮名三巻本		七巻本・大系	
2 道心おこし難し	あるはなく	58		140	79下	79下		96		152
	たれとても				79上	79上		100		157
	けふまでは				79上	79上		100		157
		60	147 146		79下	79下		105 102 100	166 165 160 157	
3 出家・遁世した人		66		33		71	133			314
4 若い女人の遁世者		65				70	132			315
5 出家の功徳		64				69	131			317
2 三宝		60			80上			106	168	
1 帰依仏	くらきより	61			80上			106	169	
2 帰依法		65			80下	72		118	184	
3 帰依僧		66			83上			120	186	
3 持戒		66	151 151		83下					
1 不殺生		67	158		84下			123	193	
2 不偸盗		68	156		85下			124	194	
3 不邪淫		69			86上			128	200	
4 不飲酒		70			87上			130	205	
5 不妄語		72			88上			144	219	
4 行業		73			88下		149		231	
5 発願		74			89下		151		237	
6 懺悔		77			91下		158		255	六
1 事理の懺悔	命をも	78			92上		158		256	
		68			92上	76			258	

要目	二巻本	一巻本	平仮名三巻	片仮名三巻本	七巻本・大系
2 刹利居士の懺悔	心より あら玉の 過ぎにしも 79		94下 94下 92上 92下	159	273 273 259 260
	71 70 69		｜ ｜ ｜	｜ ｜ ｜	387 385 377
7 布施	82		94下	163	273
8 観念	世の中を		96上 96上 96下	166 166 168	282 284 289
1 真如実相観					
2 空観					
3 不浄観	87 85 84				
	72		｜	｜	｜
9 善知識	ありしこそ 90	116	97下 98下	170	319 311
	73	25	｜	｜	415
10 臨終正念	93		99上	174	307
11 法華経	ふたつなく ふたつなき 94		99下 100下 100下	175	331 331 321
	75 74	｜ ｜	82 81	｜ ｜	423 420
12 称念弥陀	いかにして 極楽の 花はみな 96		100下 103上 103上 103下	181	349 349 349 332
	78 77 76	｜ ｜ ｜	85 84 83	｜ ｜ ｜	428 427 424
8 語りの結び	99		103上	187	349
跋	100				

二巻本『宝物集』翻刻正誤表および〈注〉の追加

1、正誤表

丁数	行	誤	正
見出し「上5オ」相当部分		5上オ	上5オ
上41ウ	1		行全体一字下げ
上44オ	1		行全体一字下げ
上45オ	1		行全体一字下げ
上45ウ	2	橋梵婆提	憍梵婆提
上46ウ	9		行全体一字下げ
下21オ	6	ゆへに譬喩経	ゆへに仏譬喩経
下26オ	5	除障	除諸障
下36オ	7	女子〈めこ〉	「女子」の左脇に「めこ」と振り仮名をつける
下59オ	5	念して	念じて
下61ウ	10	蓮華	蓮花
下63オ	1		行全体一字下げ

2、〈注〉の追加

翻刻79頁下段の下27ウ2と下28ウ2の間に、「下27ウ8「見れは見れは」下三文字朱ミセケチ」の注を追加。